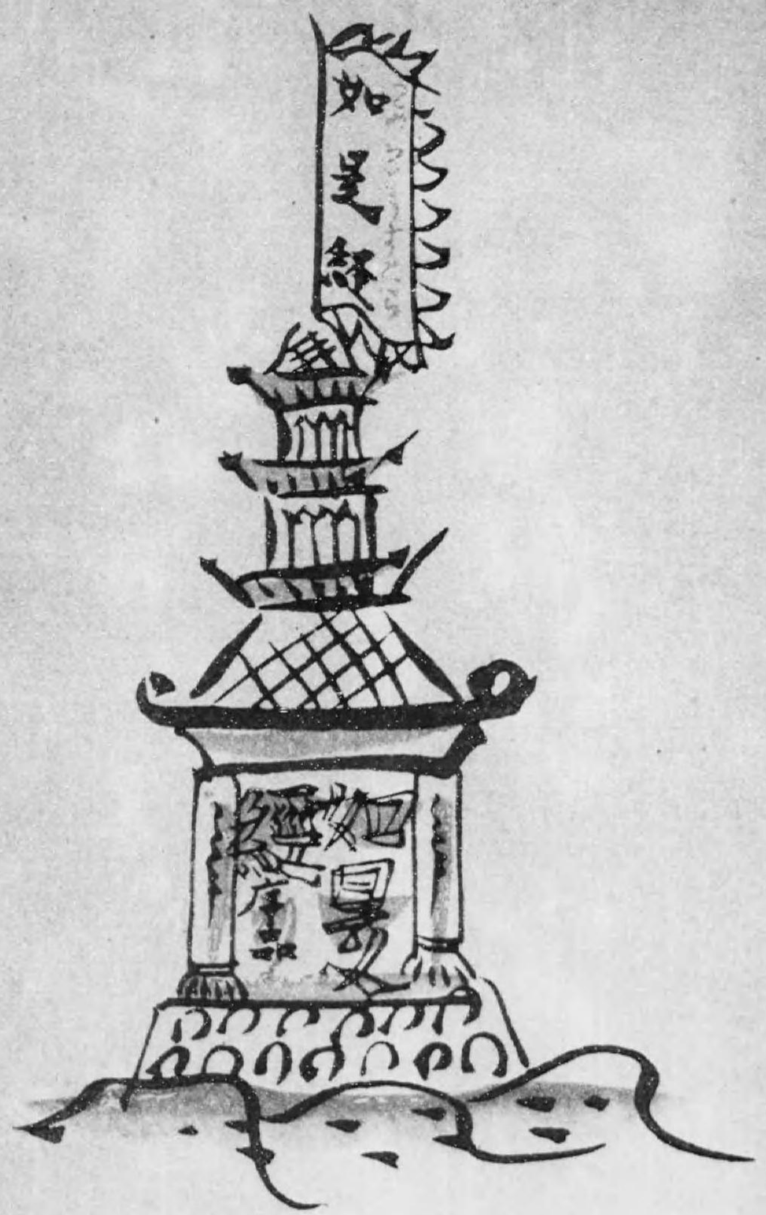
505
7


如是經

505-7

恩師
谷本富先生
梨庵

この書を　攝津の國蘆屋の里に在す

に捧げ奉る

後學　竹風生信

大正
10 11.10
内交

目次

如是經　解題

一　如是經の原名……一
二　如是經の譯名……一〇
三　如是經原書の成立史……一八
四　如是經原書の文章……三八
五　如是經の根本思想……四〇
六　如是經の譯註論評について……四七

如是經　序品

如是經解題

一……一
二……二六
三……五四
四……九八
五……一三五
六……一七五
七……一八九
八……一九四
九……二一〇
一〇……二四六

如是經（一名、光炎菩薩大師子吼經）　解題

一　如是經の原名

如是經の原名はアルゾー・シュプラーハ・ツァーラトゥーストラ（如是說汝ツァーラトゥーストラ）であります。ツァーラトゥーストラはペルシヤの聖人ゾオーロアステルの異名でありまして、光明・暗黑の二元を道德上の善惡二面の對立に進展せしめ、道義的淨化法として、火を禮拜した所謂拜火教の開祖であります。此の聖人の生時は遠く西曆紀元前八世紀といふ古昔ださうですから、印度の釋迦牟尼佛の出世よりも二世紀早い譯になります。

然らば則ち、「如是經」一卷の一切の所說は全くこのペルシヤの聖人

の説法であるか、といふに、決して左様ではありません。

著者のニーチエ先生は、若年の頃から、この聖人が大好であつたさうです。しかしながら如是經一卷は、この古聖人の名のみを借り來つて、實は著者自身の骨を筆となし、皮膚を紙となし、血を以て書ける、最も個性的な、最も自發的な、最も純粹な大創作でありますから、ペルシヤの聖人と如是經とは全く無關係と言つてもよろしい位のものであります。

それでは、何が故に、古人とはいへ、他人の名を冠して、自作の書名としたのであるか、といふ不審がここに、當然起つてまゐりますし、そのまた不審といふものも、嚴密に考へ出しますと、大體二種の疑問に別れざるを得ません。

第一は、その名の何人たるを論せず、自著に古人の名を冠する所以であります。この所以の解答としては、一つは著者ニーチエ先生の趣味を擧げねばなりません。先生の第一期の作であるショーペンハウエル論やワーグネル論なども、實は二氏の假面を着けた自畫像である如く、如是經のツァーラトフーストラもニーチエ先生の假面であります。この假面を被ることが、先生は好きであつたといへば、それだけで是非の論は沙汰止みとなりますが、形から言へば假面であつても、心の向き方から言へばがらりと趣が變つて來ます。言ふこゝろは、ツァラートフーストラは理想化せられたニーチエその人であるといふ意味に變るのであります。

今、私は理想化といふ一字を拈出しました。理想化とは何ぞ、これには少しく説明が要ります。

ドイツのマイエル教授は、その名著ニーチエ論の第三八九頁に、

藝術界にのみ起る不可思議境を說いて次のやうに言つてをられます。

「如是經はニーチエの作也と、簡單に片付けてはならぬ。如是經は二大名人フリードリヒ・ニーチエとニーチエのツァーラトゥーストラとの共著合作である。何となれば、フリードリヒ・ヘベル（ドイツ十九世紀の最大戲曲詩人）が幾度も絶叫しながらその度毎に今更の如くに驚歎せる言葉。即ち

藝術にありては
生まれし兒が父を
塵勞より解脫せしむ

ること、巨人の創作は獨特の生命を獲得して、創作者がその創作なくんば到底言ひも見もせざるべきやうの思想を言ひ繪像を見ること——この不可思議な經驗は決して啻に神秘的若くは象徵的の眞實性を有するに止まらずして、猶ほまた心理的のそれを有するからである。ゲーテについて之を言へば、ゲーテがファウストやメーフィストーフェレスとして見た眞實、タソーやオレストとして感じた感覺、エールテルや非ルヘルム・マイステルとして爲した觀察等は、フランクフルトのヨーハン・ヲルフガング・ゲーテとしては決して爲さなかつた筈のものである。フリードリヒ・テーオドール・フィシェル(Vischer)が强く言ひ放つた言葉、「凡ての詩人は彼自身よりも賢である、勿論また彼自身よりも愚である」、もまた、同樣の意味である。云々」

遠に時流を拔ける名解釋であります。生まれた子は父よりも豪い——私のいふ理想化とはこの意味であります。さすれば、ツァーラトゥーストラはニイチエ先生の愛兒・理想兒に與へられた一名に過ぎないことになります。

他の名を冠する譯は、それで可いと致して、さて次に起る問題は、何が故に、然らば、許多ある古聖賢の中から特にペルシヤの聖人ツァーラトゥーストラを選び出して、愛兒に命名したのであるか、といふ一事であります。ニーチエ先生は「ペルシヤ人ツァーラトゥーストラに敬意を表して(die Ehre geben)」と云つてゐられるのでありますが、その敬意を表せられた所以は何であらうぞ。

これに屬する解答としては、註釋者ナウマン氏の説が最も面白いと思ひます。ナウマン氏に從へば命名の選擇は必然的でなくて、偶然的であつたらうと云ふのであります。

「某の年某の日にニーチエ先生は、東洋神話の一書を開いて、次の一節を讀んだ。

ツァーラトゥーストラは、ウルミ湖畔に生れ、三十歳にして、その故郷を去りて、アーリアア州に趣き、孤獨生活の十年間を山中に暮らして、その經典ツェンド・アヴェスタを草せり。

この時忽然として、ニーチエ先生の頭の中に浮かび來れる感想は、自分の生活がツァーラトゥーストラのそれに似通ひ始めつゝあることであつた。病氣の爲とは言ひながら、三十六歳(日本流の數へ年の年齢時は明治十二年に當る)を以て、バーゼル大學の教職を去つてから後の先生もまた、孤獨の境に於て、新思想・新信念を草し創めたのであつた。先生もまた、十年の沈默の後に新たに世に出る考であつた。世に出た後の影響感化については、容易ならざる抱負を有つてゐた。多年の沈默無言の後の大師子吼——これはニーチエ先生の屢々賞揚歎美せるところであつた。ピタゴラスの門弟子等が五ケ年の沈默すら、全集の所々に出て來る。

自分の今の身の上から思ひ廻らして、先生は遂に、ツァーラトゥーストラの繪姿の中に自分を見るのが面白くなつたのであらう。病氣の爲に已むを得ずなつた孤獨の境を自分の自由意志で求めた樂易閑放の境地と見れば、ツァーラトゥーストラとの照應對比はいよ〳〵面白くなつて來るではないか。是に於いてか、先生はペルシャの聖人に敬意を表して、その御名を拜借することになつたのであらう。」

ナウマン氏の意見は、大要以上の通りであります。

以上の一事の外に、如是經時代から、先生の趣味が段々東洋趣味に遷りつゝあつたことも、如是經の命名について、閑却すべからざる大切な一要件であります。

如是經の中に現はれ來る叙景や譬喩や修辭等にも、東洋的色彩風格が著るしく加はつてゐることは、この書を讀む者の見逃がす能はざる特長であります。全篇悉く、西洋式の秩序整然たる系統を追はずして、所謂思想的電光、即ち警句的・格言的・寸鐵殺人的の言辭で綴られてゐることも、純東洋趣味であります。かゝる東洋的色彩が段々加はり來るとともに、西洋趣味に屬する反感嘲罵は、隨處に猛烈に出て來ます。ツァーラトゥーストラは、一歩一歩、非歐羅巴人・反西洋人となつて來ます。

かゝる趣味傾向が、その名を歐羅巴人に求めずして、世界最古の聖人にして、且つペルシャ人たるツァーラトゥーストラに定めしめた一原由とも見られます。

如是經の原名にして、且つ各章の終に出るAlso Sprach Zarathustraの形式も、先生自ら之を讀んでノートブックに書き留めて置かれた梵語の形式 Iti vuttakam=(獨):Also sprach der Heilige,(和):如是說法聖者)の模倣

であります。

ツァーラトゥーストラといふ名の原義は金の星であることはニーチエ先生も後に至つて始めて偶然に御承知になつたのですが、金の星とは面白いと云つて、非常に喜ばれたさうです。

二　譯名

譯名は「如是經」と簡單に、一名を「光炎菩薩大師子吼經」と命じました。この譯名については、譯者の私見で、最も大膽に思ひ切つて、東洋式・就中純佛教ぶりに飜へしました。

如是といふ文字は一つの熟語になつて居りますので、原語の Also をそのまま飜へしたものと思つて戴けばそれでよろしいのであります

すが、如是の意義については、佛教では、大分やかましい寓意があります、佛教式にこの字を用ひました以上、讀者諸君にも、その意義を承知して置いて貰ひたいのであります。

但し、その解釋に移ります前に、豫め申し上げねばならぬことは、唯この題名のみに限らず、此の如是經の飜譯の文は別として、註釋論評の拙文だけは、殆ど全く純佛教殊にわが親鸞聖人の宗教信仰に基いてゐることであります。

親鸞聖人の教を基調とすると申しましても、勿論人一倍凡愚な私のことでありますから、聖人の教義に對し奉つても、誤解だらけ見當違ひだらけでありまして、所謂盲者の大象を撫する底の批判や引用を致すことでありましやうし、聖文冒瀆の大罪を犯すことと存じますが、唯一つ、愚者なればこその一德とでも申しますか、種々の因

緣相重なり、許多の善き人々の恩寵を蒙りました御蔭で、どうやらかうやら、聖人の信海中に遊戯三昧する多幸多福の身とならせて戴きました結果、多年讀み來りましたニーチエ先生のこの「如是經」に對する解釋の如きも、從前とはからりつと打つて變つた見方になり、のみならず、從來西洋の註釋家や論評家達の文を以てしても、依然難解謎の如くであつたそれ〳〵の言語文章が、――少くとも私の信念中では――快刀亂麻を斷つが如くに、解き得られ、釋し得られるに至つたことだけは、眞に唯々不思議と申す外はないのであります。

申すまでもなく、聖人の宗敎は佛敎であります。聖人を通じて、通佛敎を觀るやうになりました私は、佛敎的見地に立つて、ニーチエ先生の如是經を身讀するやうになつたのでありますから、本書の譯名につきましても、前申します通り、どうしても佛語を用ひざるを得なかつたのであります。

そこで、いよ〳〵如是といふ文字の解釋を致すべき順序となりました。之に就いては、私の覺束ない文字を羅列するよりも、古聖の解釋を其まま拜借するのが間違がないと信じますから、龍樹菩薩の大智度論を引用させて戴きます。

「問うて曰く、諸佛の經は何を以ての故に、初に、如是の語を稱ふるや。答へて曰く、佛法の大海は信を以て能入と爲し、智を以て能度と爲す。如是とは卽ち是れ信なり。若し人、心中に信有りて淸淨なれば、是の人能く佛法に入る。若し信なければ、是の人は佛法に入る能はず。不信の者は是の事是の如くならずと言ひ、信者は是の事是の如しといふ。譬へば牛皮の未だ柔かならざれば。

屈折すべからざるが如く、無信の人も亦是の如し、譬へば牛皮の已に柔かなれば、用に隨つて作すべきが如く、有信の人も亦た是の如し。

復次に。經中に、信を手となす。と說く。人は、手ありて、寶山の中に入れば、自在に能く取れども、若し手無ければ、取る所あること能はざるが如し。有信の人も亦是の如く、佛法の無漏の根力・覺道・禪定・寶山の中に入りて、自在に取る所あり。無信は無手の如し。無手の人は寶山中に入るに則ち所取あること能はず。無信も亦是の如く、佛法の寶山に入つて、都て所得なし。（中略）是を以て の故に、如是の義は佛法の初に在り、善信の相なるが故なり。」

佛經の首は如是我聞であり、この如是經の題名は如是彼說であります。彼說は即ち我聞であります。唯二者の相異るところは。佛敎諸經は佛の所說を如是と信じ、如是經はニーチエ先生己心の聲を如是と信じ、その信ずる當體を向ふへ廻して、彼說即ちツァーラトゥーストラ所說とした點に存するのであります。その何れにしましても、龍樹所說の如く、信が第一義であることは、忘れてならない肝要事であります。

佛敎では如是を信成就と申し。我聞を聞成就と申します、之に對して彼說を何と云ひますか、彼說は即ち我聞でありますから、やはり聞成就して、如是經一卷が出來たものと見るより外は無い。それゆゑ、原名のツァーラトゥーストラを彼の一字に縮めて、「如是彼說」とすれば、字義そのものとしては全譯であります。その彼を取り去り說をも取り去つて、單に如是に略して、別に經の一字を加へたのが、即ち譯名の「如是經」であります。

經といふ貴い文字を、ニーチエの著作に奉ること、甚だ以て然るべからず、勿體なし恐れ多し、と難ずる方々があるかも知れませんが、私の信念中には、ニーチエ先生の本書へは、經の一字を奉つて然るべきものと存ずる仔細が十二分に潜んでをりますので、何の惜氣もなく、何の憚るところもなく、極めて信順敬虔の念から、經の一字を奉ることに致しました。「聖を經と爲し、菩薩を論と稱す」と云ふが如き字義に拘泥してはなりません。

しかるところ、更に別名を加へまして、

光炎菩薩大師子吼經

と譯名を附したについては、讀者諸君の中には、或は眼を睜つて驚かるる方があるかも知れません。

私見によれば、本書所說の超人は佛であり、超人を說くツァーラトゥーストラは佛經に見ゆる菩薩であります。かるがゆゑに、光明に緣あるツァーラトゥーストラを佛典の中の諸菩薩の御名から飜譯すべく、いろ〳〵諸經を拜讀してゐますうち、華嚴經の卷の第一世間淨眼品に、淨慧光炎自在王菩薩といふのが居らせられましたので勿體なくもその御名を拜借することにいたしたのであります。

また大師子吼の四文字は、勝鬘師子吼經から拜借しました。佛語の師子吼は無畏の意味であります。維摩經佛國品に「法を演じて畏るる無きこと猶ほ師子吼の如し」とあり。肇師の同註には、「師子吼は無畏の音なり、凡そ言說する所、群邪異學を畏れず、師子吼ゆれば衆獸之に下るに喩ふ」とありまして、ツァーラトゥーストラの無畏說法を喩うるにも、極めて恰當の文字であるのみならず、獅子その者が、勿論譬喩的の意味で、本書に屢現はれ來るところから、

斯く大師子吼經と譯出した次第であります。

三　如是經原書の成立史

本經の體型や、その主想の大部分は、既に餘程以前から、著者ニーチエ先生の夢想に胚胎し、その前著の所々に散見するのでありますが、本經の誕生地は、先づ以て、Sils Mariaで時は正に千八百八十一年（明治十四年、先生三十八歳）の八月でありました。折から著者をして、その豐麗な無韻の詩語で歌はしめやうした新信念は、かの有名な久遠還相觀（der Gedanke der ewigen Wiederkunft）（久遠回歸若くは無限生とも譯出せらる）でありました。この新信念の最初の閃光については、先生の自傳に次の如く出てゐます。

「本書の第一義諦・總じて人間の到達し得べき無上の肯定法、即ち久遠還相觀は千八百八十一年の八月中のことに屬する。當時、この還相觀は一紙片に走り書で認められて、その下に「人間及時代の彼岸六千尺」と書いてあつた。何日であつたか、よく覺えぬが、或る日私は、森また森を經てSilvaplanaの湖岸を逍遙しつゝSurleiの近くにある、尖塔の如く天聳り立つ巨巖の傍で足を停めた。その時のことである、彼の思想は忽然として私の心中に現はれた。その日より幾月か以前のことであつた、私は、私の趣味殊に音樂に於ける趣味の明確な激變を感じたことがあるが、思へばそれが彼の還相觀の前兆であつた。ツァーラトフーストラ全篇を擧つて悉く、音樂と觀られても差支ないと思ふ程に、耳に愬うる藝術に於ける再生が即ち、本書を草せしむる豫件であつたことは明かである。Vicenzaの背後に在る山中の一小溫泉Recoaro――千八百八

十一年の春は此處で暮らした――で、私の音樂の師匠であり、且つ友であり、又私と同樣に再生者であつたPeter Gastと共に私は、音樂と名のつくフエニクス（再生の象徴、鳥の名、序品三〇頁を見よ）が、今迄見せたよりもより輕い、より輝かしい翼で、吾々兩人の傍を飛び去つたのを見た。」

ニーチエ先生は、この年の夏頃から、多年の宿痾が漸く癒えて、全くの健康者でありました。この貴い健康、難有い體力を自覺しつゝ、如是經一篇は草せられたのであつましたが、運命の殘酷性は、かゝる時にも附き纏うて、聞くも悲慘な、涙のこぼれるやうな一事が、時も時、この時に起り始めました。

それは卽ち友誼についての先生の失望、深い深い絶望でありました。この事は、如是經本品に度々血の涙で書かれてあることですが、一體先生ほど友誼なるものを高く大きく考へた人も稀でありました。

その先生が天才偉人の一生に見るが如く、今に及んでいよ〳〵孤獨の寂しさ、獨去獨來の悲哀、知己無き自分、無援孤立の境を痛感することになつたのであります、見棄てられることは自發的な孤獨生活とは違ひます。當時、先生は、完全な友、先生を全部解する友、一切を言ひ、一切を語つて差支なき友―かやうな心友に憧がれられました。從來の一生を回顧して見るとき、その時その代に、そのやうな友が、何時もあつたやうであつた。然るに今自分の辿り行く道がいよ〳〵危險になり險惡になつた今、先生の同伴者になり得る。友は一人も無かつたのであります。

是に於てか心機一轉、先生はツアーラトフーストラといふ理想佛を創造して、圓滿無礙の友一人を得、この友をして自分の至高至聖の大目的を宣傳流布せしめました。

實に逆緣は恩寵であります。苦は人間、道に入るの階梯であります。當時先生に、理想的の友があつたならば、如是經一篇は如何になつたであらうかなどと問ふのは無益無用の詮議であります。ドイツのエカルトの云ふやうに、「汝を乘せて蓬萊境に到らしむる駿馬は苦也」であります、

如是經第一品の成立については、再び自傳を引きます。

「千八百八十二年（明治十五年、先生三十九歳）からけての冬、私は、Genua に程遠からぬ風光明媚な Rapallo 灣に居た。寒くて非常に雨の多い冬であつた。自分の健康は十分とは云へなかつた。それに、宿が直ぐ海近くに在つて、高波が夜眠を妨げるので、何かにつけて意に滿たぬことばかりであつた、それにも拘はらず―一切の一大事は「にも拘はず」で出來るといふ私の持論の活證ででもあるかのやうに―私のツアーラトフーストラが出來上がつたのは、かゝる冬であり、かゝる不如意勝の苦しい境涯からであつた。午前には、美しい街道を、南の方 Zoagli に向つて、松林を横手に、遠く海を眺めながら、上るのであつた。午後には私の健康の許すかぎり幾度も、入江をぐるりと廻つて、Santa Margherita から後の方 Porto fino の邊まで歩いた。此處と此處の風景は、皇帝フリードリヒ三世が格別愛で好ませられたので、私にも一入懷しいものとなつた。千八百八十六年（明治十九年、先生四十三歳）の秋、帝が之を最後として、人々に忘れられてゐたこの小樂天地に來られたとき、私は偶然にも再び此の海岸に居たのであつた。かゝる二つの道で、ツアーラトフーストラ自身が、典型として私の心頭に思ひ浮んだのであつた、否、私を襲ひ來つた

のであつた。

如是經の第一品は十日足らずで、千八百八十三年二月初から月半頃迄に書き上げられました。自傳に曰く、

「最後の部分はリヒヤルト・ワーグネルがヱニスで亡くなつた丁度その神聖な時刻に稿了となつた。」

その執筆の十日を除いてのかの冬は、先生に取つて、最も苦しい病氣勝ちの冬でありました。その頃サンタ・マルゲリータで先生を襲うた流行性感冒は、ゲーヌアに來られた後も、猶ほ數週間にわたつて全治するに至らなかつた。さりながら、この冬先生を最も苦しめたのは身體の病氣よりもその病める心でありました。例の知己なき悲哀・心の友なき寂寞が即ちそれであり ました。如是經第一品が友人知己の間に於いて、如何樣に見られたかといふ一事、これがそも〳〵先生を苦悶させ始めた發端でありました。何となれば、如是經第一品は、當時配本に及んだ何人からも、理解せられなかつたからであります。先生自ら曰く、

「私の考へ出した多くの事に向つては、それを解し得る程成熟した智慧を有てる人を、私は一人も見出し得なかつた、人一人(私)は無上の明晰を以て談じ得るが、但し何人からも聽かれないものであるといふことの一實證として、ツァーラトゥーストラの一書は世に在る。」

この誤解・無理解のために、先生はいかばかり元氣をそがれたことであらうぞ、蓋し察するに餘りある。之に加ふるに當時、かの流感以來常用されてゐた睡眠劑水酸化クロラールを、大なる意志力で決然斷つて了はれた結果、ローマで暮された千八百八十三年の春は、

鬱々く樂しまざる陰氣な春となつた。自傳に曰く、

「それから、ローマに於ける重苦しい春となつた、私はローマに住むことになつた――が、ローマに住むは容易でなかつた。自分勝手に好き好んで來たのでなかつたこのローマ、廣い世界の中でツアーラトフーストラの詩人には、最も相應しからざるこのローマには、眞に一方ならず閉口した。私は離れやうとした、離れて、ローマの正反對であるAquila――ローマに對する敵慨心から、無神論者であり、儀表的の教會嫌ひであり、また（精神的には）私の近親の一人でゐらせられた、ホウヘンシュタウフエン家の英帝フリードリヒ二世の記念として、私が將來自分の場所を建設するであらう如くに、建設せられた――そのAquilaの方へと思つた。が、何事もままならぬが世の中である。私は又も歸り來らねばならなかつた。とうとう、反基督敎的の土地を土地を、と尋ねあぐんだ揚句の果は、（やはりローマの）Piazza（廣場の意）Barberiniで諦めることになつた。そこで（反基督敎徒であるとふやうな）惡評を出來るだけ避けやうために、私は一度Palazzo del Quirinale（キリナーレは宮殿の意、この丘上に法王の宮殿あり、今は皇帝の有）にまで往つて、哲學者の居られるやうな靜かな室はありませんか、と尋ねて見たことがあつたかと思ふが、この一事は今も氣になる。前に云つた廣場の上の高い樓上で――そこからはローマが一眸の下に見え、噴水の湧き出る音がずつと下の方から聞こえた――未だ曾て有らざりし程の寂しい歌である「夜の歌」は出來た。此頃常に何とも言ひやうのない陰鬱な旋律が私の周圍を歩き廻つてゐたが、かゝる旋律の復唱句を「不死の前に死せる」の言葉で見附け出した。」

この春には、先生は妹のエリーザベトさんと一緒に、ローマに居られましたが、蒸し暑い天氣と例の元氣沮喪とで弱り果てゝ、エリーザベトさんが、印刷の事や出版者の事は全部自分で面倒を見ますから、と申し出ても、先生は、何一つ書かないことに、勿論ツァーラトフーストラの續稿は斷じて執筆しないことに決心して、更に動ずる氣色がありませんでした。然るに兄妹うち揃うて、六月十七日にスヰスに歸り、再び懷かしい山容水態に接することになつてからは、先生のあらゆる愉快な創作力が、眼を醒ましたやうに活氣附いて來ました。折からドイツに還つてゐた妹さんへ、これから發送される原稿のために用意すべく、言ひ送つた書翰には、

「向ふ三ケ月の期限でこの家を借りた。イタリヤの空氣のために自分の勇氣を奪ひ去られるなら、自分は實に〳〵天下の大馬鹿者だ。折々變な考へが出る、これから如何なるだらうかと。自分の將來は、自分に取つて、世の中の最も暗黑なる事件だ。しかしまだ〳〵、片付けねばならない多くの仕事が殘つてゐるから、この方附ける事だけなりとも自分の將來と考へ、其他一切の事は、お前と神々にうち任すべきものであらう。」

とあります。

如是經の第二品は六月二十六日から七月六日までの間に、シルスマリーアで書かれました。自傳に曰く、

「夏、ツァーラトフーストラ觀の初の閃光が私を照したその聖地で、第二のツァーラトフーストラは出來た。十日で足りた。第一篇も第三篇も、また終篇も、何れの際にも十日以上かいつたことはない。」

先生はしば〳〵、如是經執筆中に體驗した踴躍歡喜の狀態を語られました。山中逍遙の際など、無數の思想が襲ひ來るのを、あたふたと手帳に鉛筆で書き入れ、宿に歸つて後、インキで夜半まで寫し取つたのでありました。この時の靈感的境地・凡人の窺ひ知る能はざる別乾坤の淸淨地は、これまた極めて靈感的名文で、自傳に遺憾なく書かれてあります。遺憾千萬なのは、譯者の譯文の拙劣極まることであります。まことにわれながら愛想が盡きます、が、今更仕方がありません。その文に曰く、

『强い古代に生れた詩人達から靈感と名づけられた不可思議物について、十九世紀末の今日、人誰か明確な概念を有するであらうか、その人無しといふ場合、私自身、それを描かうと思ふ。迷信を有することが最も少い人でも、人は全く、單に人力以上の或る他力の示現であり、他力の辯才天女であり、他力の媒體たるに過ぎないことを拒否する考は無からう。人一人を最も强く震撼驚倒せしむる程の事が、突如として、言語に絕する程の確實さと微妙さとを以て、眼に見え、耳に聞こゆるやうになる、それが即ち靈感の意義ならば、そは全く概念にあらずして、端的に事實その者である。かゝる場合、聞くばかりである——求めはしない。受けるばかりである——授者が何者であるかは問題にならない。電光の如く、某の思想が閃めき來る時、それが必然的で、間髮を入れざる底の鹽梅式であるので——私は未だ曾て、我他彼此の揀擇をしたことがなかつた。踴躍歡喜の心境——その心境の恐るべき緊張は折々解けて流れて涙の川となり、その心境の眞最中の足並は、われ知らず或は疾風の如く、或は牛歩の如くなる。完全な

無我夢中――しかもそれは、足の爪先にまでも起る數限りなき種々の身顫ひや冷水をあびせかけられたやうな感じやを最も明瞭に意識しながら起る。幸福の海――その海に在りては、最も苦しきものも、最も悲しきものも、不幸としてゞはなく、かゝる光明遍照海中の因緣者として、遊戯相手として、無くてはならぬ色彩として活躍する。韻律的權衡の本能――その本能は詩形の全面に隈なく渡り行く（韻律の長短と、廣大無邊の韻律に向つての要求とは、殆ど靈感の威力を量る尺度であり、靈感の威壓と緊張とに對する一種の調和劑である）。

以上の凡ては最高度の非自由意志式に、さりながらまた自由感情・無制限・威力・神力等の嵐の中に於けるやうに顯現する。諸相と譬喩との非自由意志性は最も不可思議の境地である。何が諸相で、何が譬喩であるかは毛頭考に上らない、一切は最も切實な、最も正しい、最も純な文章となつて現はれ來る。ツァーラトゥストラの云へる如く、實際見えるのである。「一切の物は、此處に、信樂するかの如くに、物皆が自から近づき來つて譬喩たらんと欲す悅豫して、汝の說法に來り汝に媚ぶ。物皆は汝の脊に騎らんと思へばなり。汝は此處に、一々の譬喩に跨りて一々の眞理に走り向ふ。此處には一切の實相の語と語の函とは汝の爲に躍り出づ。一切の實相は此處にては語とならんと欲し、一切の發達現成は汝によつて語られんことを欲す――」。

以上は靈感に於ける私の體驗である。この體驗を聞いて、「そはまた自分のである」と、私に向つて言ふを憚らざる人を得んがためには、幾千年の昔に歸らねばならないことを、私は疑はない、

云々』

千八百八十三年、先生はドイツのNaumburgに歸つて來ましたが、此の地の滯留は目出度いものではなかつた。それには、家庭の面倒も手傳つてゐたのでありましたが、ドイツ内地の空氣が製作の氣分に適しないのと、友人のRée氏やLou Salomé氏等との關係もおもしろくなくなつたことなどが、恐ろしく先生を憂鬱に陷らしめた主因でありました。空想の翼は弱り、觀照の眼は疲れました。

そこで此處を去つて、ゲーヌアに移り、ゲーヌアからまた諸方に轉々した後、千八百八十三年から千八百八十四年（明治十七年、先生四十一歳）にかけての冬をフランスのNiceに落ち着きました。此處の澄み切つた天の色は、この上なく先生を喜ばせました。ナウムブルクで受けた重苦

しい壓迫の感じは一掃されました。食慾も消化も善くなりました。それと共に、創作力は復活しました。日々刻々、如是經の完成が氣に懸つてゐました。當時先生は自分を一世の大導師たるべき天才と自覺し、時代を警策すべき大任務を負へる自己に思ひ及ぶとき、自分の壽命の甚だ短きを痛感せずにはゐられませんでした。だから、自分の健康恢復と共に、先生は直ちに勤勉倦まざる人となりました。自傳に云く

「次の冬、當時始めて私の生活の中に照し込んで來たニースの雲の無い澄明な天の下に、第三のツアーラトフーストラは發見せられ、やがて稿了となつた。」

友人達からの難有い理解の言葉は、第三品の出現の後にも、先生には來なかつたのでありました。

千八百八十四年の四月、先生はニースを去つてイタリヤのエニスに來ました。六月の初め舊知の人々に會ふべく、Basel や Zürich に旅行しました。常に急速度の發達展開を爲しつゝ、人生至高の靈山に登りゆく人々は、何人に限らず、斯る訪問を爲すべきものではないといふことを證據立つるかの如くに、此の先生の旅行訪問は徒勞に終りました。思想界の一處に停滯して何等の進展を遂げざる、またそれを嫌忌する人々は、先生を理解もしなければ尊重もしませんでした。殆ど病氣にもならんずる程の失望落膽は、かゝる時、人間として免れ難いことであります。先生はそれを觀破しました。ガスト氏に送つた書翰の一節に、「此一事は實に馬鹿々々しきことゞもにて凡ての點に於いて小生を退屈せしめ疲勞の極に達せしめたることに候」とあります。

此の年の夏、先生はバーゼルから例のシルス・マリーアに移りました。此處で先生は Heinrich von Stein の訪問を受けて渴者の水を得たやうな喜び方でありました。シュタイン氏は十九世紀後半の哲學的文人中稀に見る光明兒でありました。詩人兼思想家としての氏は、先生に取りては、先生門人中麒麟兒となるが如くに思はれました。遺憾なことには、シュタイン氏蚤世の爲に、この希望は空望となりました。先生は智慧の優れた、創作力に富める門弟子を得て、自分の周圍を繞る沈默の堅氷を打ち碎きたい念頭を有つてゐられたのでありますから、シュタイン氏との會合がいかばかり嬉しかつたかは、想像に餘りあることであります。

千八百八十四年の春、エニスに於いて既に、如是經を書き續ける考でありましたが、第四品の書き初めは、チューリヒ滯在中の秋で

ありました。十月末、フランスのMentonで、筆を執りつゝあつた先生は、マントンの病人地であるのを嫌つて、再びニースに歸り、翌年の千八百三十五年（明治十八年、先生四十二歳）の正月末から二月中頃迄に第四品の原稿は出來上りました。

この第四品を、先生は、稿本として、僅々四十部印刷しましたが、先生自身の手から、贈呈せられた向は七部だけであつたさうです。

四　如是經原書の文章

ニーチェ先生が、その友Rohde氏へ與へた書翰には、

「小生は、このツァーラトゥーストラ一卷の文章を以てドイツ語を完全の域に進ましめたることと自惚居申候。ドイツ文は、ルテル第一歩をなし、ゲーテ第二歩をなし、小生は第三歩をなしたるなり。見よ、わが友、雄健と婉曲と流暢とが、曾て既にわが國語に於いて、小生の文の如く兼備相卽せるもの有之候や。」

とあります。その抱負の尋常ならざるを見るべしであります。これは決して、著者が誇大の言ではなく、ルテル以後、先生ほどの筆力の天才はドイツに出なかつたといふのが天下の定評であります。ゲーテもシラーもハイネも、其他の詩人文豪は固より云ふに及ばず、何人も、言語の生命の横溢せる點に於いて先生の右に出づるものは無い。

かゝる天才のかゝる名文を、わが邦文に――しかも私如き此上ない惡文家が――譯出しやうといふのでありますから、越權とも、吾身知らずとも、滑稽とも、何ともかとも云ひやうがありません。眞

に無慚無愧の骨頂であります。佛頭に糞を塗るの誹は、譯者の甘んじて受くるところであります。

五　如是經の根本思想

本經の根本思想は、一に超人、二に久遠回歸、三に價値轉換であります。それを私は、親鸞聖人の教を基準として、超人を聖人の無量壽無量光佛から、久遠回歸を聖人の還相廻向から、價値轉換を聖人の廻心から、觀て行くのであります。

以上の思想・信念・信仰を茲に解釋するのが解題の順序でありますが、これは態と避けます。その故は、以上の三大信念なるものは、本文に入つてから、隨所に解釋し闡明するのが便宜であるのみならず、如是經全篇、形は散文にして想は詩でありますから、今之を私の拙い筆で、概念的に解明してゆきますと、血の滴るやうな熱烈な宗教味がとんと消え失せて了ひ、折角の煖皮肉が死肉となるからであります。

唯こゝに掲げて置きたいのは、原文各章を、以上の三大想の下に分類按排した表であります。かやうに分類することは勿論、系統を立せざる先生の本義に背くことであり、且つはまた各章の含蓄せる無限の妙味は、多少なりとも一々以上の三大想を貫綜縷練せざるはないのでありますから。分類按排は唯、初心の讀者の便宜を思ふ老婆親切と見て戴きたい、章數は各品を通じて八十であります。

一　超人（佛）

序品全部
第六十四章
第六十五章
第六十六章
第六十七章
第六十八章
第六十九章
第七十一章
第七十三章
第七十六章
第八十章

二　久遠回歸（久遠還相）

第四十四章
第四十六章
第五十七章
第五十九章

第六十章
第七十九章
第七十章

三　一切價値の轉換（廻心）

(い)此土と彼土
第三章
第四章
第九章
第二十六章
第七十二章
第七十四章
第七十七章
第七十八章
(ろ)善惡の彼岸
第六章
第十三章
第十九章
第二十八章

第二十九章
第四十三章
第五十五章
(は)廻施の法
第二十二章
(に)正法・邪法
第五章
第四十九章
(ほ)友人・敵人
第十四章
(へ)獨去獨來
第十二章
第四十章
第四十八章
第五十六章
第二十五章
第二十七章
第五十四章
第二十三章
第十六章

第三十一章
第五十三章
(と)創造者とその道
第一章
第十七章
第三十三章
第四十七章
第五十二章
(ち)天才と能才
第八章
(り)智慧・學問・文明・文化
第二章
第五十章
第十章
第二十四章
第四十五章
第五十一章
第六十一章
第三十五章
第七章

第三十章　第三十六章
第三十七章　第三十八章
第三十九章　第四十二章
第七十五章
(ぬ)
生死
第二十一章　第三十二章
第三十四章　第四十一章
第五十六章
(る)
男女
第十八章　第二十章
(を)
國家・國王・國民
第十一章　第十五章

第六十三章

この順序に觀てゆくのも、面白いかもしれません。しかし、それは、勿論、全篇を一應讀過した後の御慰みであります。

六　譯註論評について

本書の譯文は、現時文壇の驍將學友生田長江君が、明治四十三年に譯出せられ、爾今廣く世に行はれてゐるのでありますから、譯文だけの刊行ならば、何も今更私如き文に拙い、學に薄い者が屋上屋を重ぬる如き愚を演出する要は無いのであります。そんなら、註釋論評の文はと、問はれるとき。これまた恥ぢ入る外はないのでありますが、何分にも、原書は難解の一書　註釋書の既に出づべくして

未だ出でない今日、老朽敗殘の私が已むを得ず筆を執りまして杜撰の此の書を公にしました結果が、ニーチェ研究殊に如是經研究の一助ともなり、且つは又唯物思想萬能の今日に、何等かの警策にもなりましたらば、との老婆心から、恥かしさも身の程もうち忘れ、とう〳〵思ひ切つて、こんなものを世に出すことになりました。

譯語については、生田君の名譯から、いろ〳〵教を受けましたことを、こゝに厚く感謝いたします。

本書は卷頭に掲げ置きましたやうに小生の恩師梨庵谷本富先生に捧げ奉る。と書き出しますと、もう涙ぐまれて、後が書けませぬ。

六方禮經に曰く、

「師の弟子に敎ふるに五事あり。一には、當に疾く知らしむべし。二には當に他人の弟子に勝れしむべし。三には當に知りて忘れざらしむべし。四には諸の疑難は悉く爲に之を解說す。五には、弟子の智慧をして師より勝れしめんと欲す。」

先生は、まことに、この五事を兼ね備へられてゐらせられる名師匠であります。然るに小生は何をか成せし。師の大いなる期待に背いて、放浪幾十年、徒らに老ひ、空しく衰へ、いつ知れず四十九歳の馬齡を重ね候ひき。今後の事推して知るべしであります。嗚呼ま

Also sprach Zarathustra

Ein Buch für Alle und Keinen

Von

Friedrich Nietzsche

如是經

(光炎菩薩大師子吼經)

一切衆生悉可讀
一切衆生不可讀

エチーニ・ヒリドーリフ

た何をか爲し得ん、唯々慚愧の外はありませぬ。久方振に先生の大喝を喫すべく、せめてはこの小かな一書を先生の坐右に捧げ申して、先生の長廣舌相の大光明の遍照を祈り奉る。

大正十年七月二十六日

北海道旭川にて白樺聳ゆる家に
孫の頭を撫しつゝ

竹風生

譯者曰

有信者　悉可讀

無信者　不可讀

如是經

序品

（光炎菩薩　初轉法輪）

一

光炎菩薩、御齢三十にして、その故郷を去り、故郷の湖邊を去りて、遠く山に入りたまへり。山に住して禪定に入り、孤獨寂寞を樂しみたまふこと、茲に十年なるに、未だ曾て倦みたまふことなかりき。十年の後、心機遂に一轉、某の朝、曙光を仰いで起ち、昇る大日輪を仰いで、語つて曰く、

「三十歳」とあるに眼を着けねはなりません。更に「十年の修行」を看過してはならない。孔子は「三十にして立つ」といはれた。「立つ」とは如何なる意味か。非常に夙成な人や天才は別と致して、吾々凡人の境地から考へて見ても、三十頃から思想の上に大變化が生ずるのが普通であります。まことにゲエテ先生が云つたやうに、人の一生は世界歴史の縮圖であります、云ふこゝろは、人皆生れながらに、祖先の智慧や才覺を有するものでない以上、何んな人間も、そも〳〵の始めから、出立せねばならないゆゑ、人類の文化の發展を一身に體現して進み行くものだといふ意味であります。

例を擧ぐれば際限がありませんが、試みに一二を云つて見やうなら、釋迦牟尼佛は三十九の御年に、あらゆる家族の繫縛から離れて、深山の奥に入られ、六ケ年の難行苦行を積まれて後、三十五歳を以て、菩提樹下に成道せられた。わが親鸞聖人は同じく二十九歳で、法然上人の門に走つて、聖道門の教義を捨て〻淨土門に歸入せられ、同じく三十五歳を以て流罪の逆緣を便りに、衆生濟度の序開きをなされました。日蓮上人が法華傳弘の發軫はたしか三十二歳であつたと思ひます。「然るに、クリストは三十になるかならぬ若年で殺されたのであるから、その教が未熟で惜しいものだ、若しクリストが、せめて四十歳まで生き存らへたなら、その教その法は一變したであらう、」といふのがニイチエ先生のクリスト觀であります。彼是を思ひうかべて、三十歳上山の意義甚深なるを味ふべしぢや。

「山中修行」といふ一語にも甚大の意義があります。一體何んな

宗教でも、一たび穢土を厭離し浄土を欣求するものでなければなりません。歴代の祖師開山達、何れも然らざるはない。佛教は厭世教だ、見るに足らず聽くに堪へずなど、輕々しく批評し去る人々があるが、以ての外の僻言である。此のありのまゝの現世相に愛想もこそも盡き果てぬれば、こそ、家族も棄て、一切の繫縛からも離れて、山へも入り、難行苦行もするのではありませんか。ニイチエの教は樂天教だなんぞと早合點に埒を明けてはならない。この現前の世相を見て、それで善い結構だといふのなら、聖賢の教は要らざる婆々談義ぢや。古より幾人の聖人幾人の高僧知識が現はれ來り現はれ來り、入り變り立ち變り、口を酸くし筆を枯らして、說いても書いても、猶ほ〳〵今見るが如き人間の淺間しさ、生老病死の四苦は固より百八の煩惱に

責めさいなまれて、蓄生餓鬼にも劣つた生活に蠢々して居る有樣を見ては、人は何の爲に生れ、何の爲に死ぬるのだか、誰しも疑惑の淵に沈まざるを得ないではないか。眞に穢土である、不淨の土である。大きな聲して、婆婆卽寂光土だ、日々是好日だなんどゝ、澄まし込んで居られるものではない。一旦厭はしい世と觀じてからは、一刻も、現在に安住しては居られない。

「三千世界に充てらん火をも過ぎ行きて」法が聞きたい、生死の一大事が究めたい。が、聞くべき法なく、師とすべき人なく、諸〳〵の人は皆厭はしいとあつては、遠く人界を去つて大自然の聲に耳傾くる外はなからう。ゲエテ先生が、自然を通じて、神の顯現を見ると云つたのも、山川草木禽獸蟲魚の種々相を觀なかつたなら自分は飛んでもない人間になつてゐたであらうと云ふの

も、或は禪家の所謂無情說法と云ふのも、蘇東坡先生の、溪聲便是廣長舌・山色豈非清淨身と云ふ有名な詩の意味も、畢竟するに、私の多い、迷の多い、無明長夜の人界を去つて、大自然の懷に抱かれ、超然として、內觀自省の三昧に入つた境地からでなくては、到底淨土の風光は拜まれないと云ふ心でありませう。著者のニイチエ先生が、煩雜いドイツを去つて、絕えず空靑く氣淸き南歐の別天地に身を隱して靜かに「思想を捕獲」したのも、同じ意味合の厭穢欣淨の心がなさしめた自然の行方であります。

「曙光を仰いで立ち、昇る大日輪を迎ふ」貴い言葉である。曙光と云ふも日輪と云ふも、闇黑に對する光明の象徵である。迷に對する悟の謂である。妄に對する眞の意である。佛本行集經の成

無上道品に、佛の成道の刹那を說いて曰く。

其の夜三分已に過ぎて。第四に夜の後分に於いて、明星將に初めて出現せんと欲する時、夜尙、寂靜にして、一切の衆生、行くと行かざると皆未だ覺悟せず。是の時婆伽婆(佛)、卽ち智見を生じて、阿耨多羅三藐三菩提(正覺)を成じたまふ。而して偈ありて說く、

『是の夜四分の三已に過ぎて、餘の後の一分に、明將に現ずんとす、
衆類の、行と不と、皆未だ動かず、是の時、大聖無上尊、
衆苦滅し已りて菩提を得たまひ、卽ち世間の一切智と名づく。』

太陽の光未だ現はれず、世は擧つて猶ほ黑闇々たるに、佛の智

慧の光明、十方世界に照耀して一切衆生悉く攝取せられ、各〳〵相見、各〳〵相知り、「此處に亦復衆生あるか、此處に、亦復衆生あるか」と相語りて、驚歎する趣が、たとへがたなく貴い。

日蓮上人は、建長五年、安房の山嶺に登り、赫々たる東海の旭日に對して、高聲に南無妙法蓮華經を唱ふること十遍。かくして、教法弘通の第一聲を放たれたと傳へられてあります。

ハウプトマン氏の戯曲「沈鐘」の主人公ハインリヒが末期の一句「太陽は登る、夜は長し」の意味も味へば味ふほど難有い。まことに無明の夜は長い。われ四十九年の非を知ると云つた唐人を笑ひ得る人が幾人あるでありませうか。孔子は四十にして惑はずと云はれました。光炎菩薩は四十歳にして、無明を脱して覺者の境地に立つたのである。人事と思つてはならぬ。人々各〳〵自家の心事を檢討すべしであります。

「われ、星中の王たる汝に告ぐ。汝は照すを以て汝の生命とす。若し、照さるべきものなかつせば、汝何を以てか汝の幸福となさん。

汝の來つてわが仙窟を照らすこと、十年まさに一日の如し。れごもこのわれなく、わが鶯なく、わが蛇なかつせば、汝恐らくは、汝の光と汝の道とに飽けるならん。

さはれ、吾等は、朝ごとに汝を待てり、汝の光明を享けて樂めり、樂んで後汝の幸を祈れり。

以上三節は次節の伏線とも見るべし。太陽は照すのが生命である以上、照すべき當體がなければ、さぞ寂しからう。蛇や鷲が居なければ、光も道も、照し甲斐なく、來甲斐がなからう、と云ふのは、一見甚だ高慢痴氣のたは言のやうに響く、が、こゝが面白いところぢや。太陽の大光明を自分一身に引き受けるところが即ち宗教的自覺と云ふものである。日も月も、山川も草木も、國土も人間も、我あるが爲に存するのであるとまでに、徹底的に自覺するとき、山川生き、草木笑ひ、國土も衆生も嬉々として踊り出すのぢや。萬物同根の理も、天人一如の大道も、皆、我に悶へ、我に目醒めて、愕然大悟した後の踴躍歡喜の心持なのであります。されば、親鸞聖人は、「歎異抄」の中に、「彌陀の五劫思惟の願をよく〳〵案ずれば偏へに親鸞一人が爲なりけり」と御述懷なされました。何といふ崇高い信仰なのでありませう。

太陽は自分一人を照してくれたのだと思へばこそ、感謝の念も湧き出でゝ、太陽の幸を祝福するに至るのであつて、總じて、何事によらず、宗教的の見方はとんと世間並の見方とはあべこべになるところが、至極妙なのである。

第三節に、蛇と鷲が始めて飛び出して來ました。何れも、吾々日本人から云うと、物騷極まる氣味の惡い代物で、何だか有難味を無くされてしまうやうな氣分になるが、斯ういふところが、一面には西洋式の面白いところであり、また一面には東西兩洋の思想表現法の著るしい相違であるから。此處暫らく、西洋氣分になつて、厭な顏をしないで讀んで戴きたい。

蛇も鷲も勿論譬喩である。蛇は智の象徴、鷲は勇の象徴である。菩薩は仁者となつて法を説き徳を施さうと云ふのだから、智仁勇の三尊を立てた趣に解すればよい。観音・勢至の二菩薩が慈悲と智慧とを司つて、阿彌陀如來に隨伴してゐられるやうな鹽梅式である。蛇菩薩・鷲菩薩はをかしいなんどゝ茶化してはいけません。

見よ、蜜を作りて多きに過ぎたる蜂はその蜜に飽けるならずや。われもまた智を集むること多きに過ぎたり。われは、延ばし來る多くの手を要む。

かの賢きものゝ、再びその愚なるを曉りて喜び、かの貧しきものゝ、再びその富めるを覺えて喜ぶに

至らんまで、希くはわれ、或は施し、或は頒たん。

太陽がその光を惠んで惜まざる如く、智慧を集めた自分は智を頒たずにはゐられない。佛教の所謂法施である、常行大悲である。自利の後の利他行である、自信の後の教人信に外ならない。

財施は盡くることあるべし。法施は無盡藏である。頒つところ愈々多くして、利益を蒙るもの愈々多く、しかも施者に一分の増減なし。不思議といふもなか〳〵愚なりける次第である。マッチ一本の火も、之を幾萬本に移し點じて、その火力の少しも増減なきを見て、自然の妙を悟るべしである。

延ばし來る手は法施を受ける人々のことである。が、後に本

品に入りて、千手の施者といふ語があります。即ち千手觀音の意である、おもしろいですな。

賢者が愚者となる、これが全く宗教の妙諦ぢや。智者第一と讃へられた法然上人が、自らは愚痴の法然房といはれ、親鸞聖人が愚禿を標榜せられたところに宗教的大自覺が現はれてゐるのであります。大眞理の前には、人間の賢なるもの、よしや無上の賢としたところで、果して何程の價値があらうぞ。

貧しきものが富む。これがまた宗教の妙諦ぢや。勿論心の上の沙汰であつて、財の上の所談ではない。一たび大悟の境に入れば、天地萬物皆我有とまで、禪家の教は言ふではないか。古歌に

我といふちいさい心捨て見よ大千世界障るものなし

欲し惜しや憎くや可愛とおもはねば今は世界が丸で我もの

虛空法界を心の主とした人々の風光である。今まで心の貧しかつたものが忽ち心機一轉、心靈界の大福長者になるから、不思議であります。一休和尚の

あら樂や虛空を家と住みなして心にかゝる造作もなし

も同じ境界を詠ぜられた道歌である。虛空とは何ぢや、そこいらの禪僧に一喝を食つて教を乞ふが宜しい。

畢竟天下の廣居に住んでゐる心持になるのが、宗教心の顯現であります。

かゝらん爲に、われはこの山を降りて谷に趣かざるべからず。ゆふべ夕べ、海の彼方に沒して猶ほ下

界に光を惠む汝の如く。

われは汝の如く沈み行かざるべからず、沈み行くことは人の語なり、われは、その人の許に趣かんとす。

されば、靜かなる汝の眼よ、餘りに大いなる人の幸をも、猶ほ且つ些の嫉妬なく眺め得る汝の眼よ、われを祝せ。

されば汝、わが盃を祝せ、盃はまさに溢れんとす、水は金色の波を湛へて、盃の外に溢れ出で、八面玲瓏として、汝の快樂を映じ出だすを見よ。

見よ、盃の水はまさに虛しむらんとす、而して

7　8　9　10

われ光炎は、再び人。ならんとす。」

かくの如くして、光炎菩薩の還相廻向は始まる。

11

この還相廻向の文字は、後の第四章で、詳說しますから、こゝ暫らく、下山說法の意味、上求菩提の菩薩が下化衆生に向ひたまふ意味に解して置いて戴きたい。

何處々々までも、日輪を離れないのが愉快であります。御日様は、大光明を宇宙に施與して恩心なく、人間の幸福を見ても憎心なし。これが難有いところであります。今や、光炎菩薩、普く、法を一切人に施さんとする一世の山出である。過ぎにし十年の女を思へば、嗚呼唯この心ばかり。その勇猛心は驚とな

12

り、その智慧光は龍となりて、山の空・山の地を飛び狂ひ驅け巡るも、山川草木の間に宴坐して、獨り味ひ・獨り微笑し・獨り嘯いて何にかはせん。照さるべき我なき時、太陽も寂しいと感ずるほどなるを、ましてや人間の我、救はるべき衆生無き時、嗚呼噫、この超世の悲願を何とかせんや。人は太陽の西に隱るゝを見て、太陽沈むと言ひ沒すと云ふ。われもまた、過去十年の向上の道を向け變へて向下の道を辿り、山を出でて人に下れば、彼の世を厭うて山に登れる光炎子、再び人の世を戀ひ慕うて煩腦海中に墮落せりとや云はれん。焉んぞ知らん、日の西に隱るるは、他の世界を照さんが爲なるを。向下は即ち向上の道である。衆生濟度の大願を成就せんが爲である。佛敎の所謂退歩却來である、回光反照である、還來穢土である。厭世は忽ち救世となるのぢや。下らざるを得ない、下らずには居られない。下山の路は即ち上山の路、面白いことであります。

さるにても、過ぎにし十年の友とては、之を身にして云へばわが影ばかりである。影は日の照らすとき月の影さすとき、わが傍を離れさりし唯一無二の友であつた。日は人の世にも光るのである、月も、人の世の夜を照らすに、毛頭變りはないけれど、さすがに十年の山住居、日にも月にも、今更のやうに、名殘は惜しい。別して、今朝が別れの一人旅、酒あらば……といふところであらうが、あいにく山中に酒は無い。が、心の盃には事缺かぬ身の上、その心の盃に清澄な悟りの水を注ぎ込んで、溢れ出る喜悅の情を酌めば、至公至大の大日輪は、人の幸は卽ち己れの幸とやうに、嬉々として快樂の大光明を放つて、

その水の一滴一滴の盡十方に流れよとばかり、菩薩の心の盃を照らして、今朝の山出を祝福するのであつた。

かくして、太陽に祝福された光炎菩薩は、廣く衆生の爲に闇冥を照除すべく、再び人となるのである。

この人となるの一句、著者が大獅子吼の雷轟である。この一言、三千大千世界を震撼せしむ、と評しても過言ではない。諸君、思へ。世に法を說き道を傳ふるもの、何ぞ、しかく、賢者ぶり、聖者ぶり、學者ぶり、豪がり强がることの甚だしきや。今の世の學問は、名聞名利の爲の學問ではないか。名利を離れて、學問なし。勝他を離れて學問なし、これでは、百千億劫を經たつて、衆生の助かり救はるる時は來ないに極つてゐる。

この意味を親鸞聖人は、その敎行信證に、外に「賢善精進の相を現ずることなかれ、內に虛假を懷けばなり」と云はれた。今の世に、虛假を懷く賢者の如何に多きかを見られよ。まことに恐ろしい世の中になつたものではある。

今の世では、人皆が假名假相に囚はられてゐるのであります。頭上にばかり眼を向けて脚下を忘れてゐるのであります。自分が倒れかゝつてゐながら、救世濟民は可笑しいではないか。「臨濟錄」といふ書物に、無位の眞人といふ語があります。釋尊もクリスト上人も、無位の眞人となつて、法を說かれ道を說かれたところが難有いのではありませぬか。

人となつて法を說くといふのが、だから難有い言葉なのである。佛敎では、その攝化濟度の方便は實に無盡藏である。豈に曾に人となるのみならんやで、その殺活自在の妙境力用は、と

てもく、説き盡せるものではない。逆を履んで常に順なる趣や、塵を塵勞に和する行き方や、魔に入ることを示して佛智慧に順ずるの道や、一々列擧するに遑がない。奈良の春朝上人は、牢獄の中に苦しんでゐる罪人を敎化すべく、自らわざと罪を犯して罪人となり、牢屋に入れられて、法を說かれたと云ふ話が傳はつてゐる。是れ即ち、今云ふところの魔に入ることを示して佛智慧に順ずるの一例である。よしや、かほどまでにはなり得ずとするも、せめては、人の上に、人爲的に冠する一切の汚はしい形容詞を取り去つて、純乎たる人間となつて法を說くといふことは、著者の大卓見と謂ふべしで、別して、著者在世の時の西洋では、この一語がどの位の大痛棒であつたかは、想ひやるだに痛快であります。

も少し、この人となつて法を說くの意味を徹見すべく、私は、觀音經の、觀世音菩薩三十三身示現の敎を味つて見たい。

經に據れば、觀世音菩薩は、「佛身を以て得度すべき者には佛身を現じて爲に法を說き、長者・居士・宰官・波羅門の婦女の身を以て得度すべきものには婦女の身を現じて爲に法を說き、童男・童女の身を以て得度すべき者には童男・童女の身を現じて爲に法を說く」、等と說かれてあります。觀世音菩薩は千手千眼の菩薩であります。神通自在變化自在な菩薩であります。種々の形を以て、諸の國土に遊びて衆生を度脫する菩薩であります。

これが高大無邊の佛智慧の顯現たることは、云ふを待たないことであるが、吾々凡夫にも、一たびこの觀音心を悟る以上は、

何の苦もなく出來得る妙用であります。身を現ずるとは、心を現ずることなのであらねばならない。私自身の問題にして說いて見ると、私が學生諸君に接するときには、私の心が學生の心にならねば敎育は出來ないではないか。釋迦が法を說かるゝとき、衆生の心を以て心となし玉ひたればこそ、吾々衆生が救はれるのではないか。然るに、敎師だぞといふ冠を着ける、奧樣だぞといふ假名を難有がる、大臣だぞといふ假相に誇る、勞働者だぞと威張り出す、資本家だぞと空嘯く。天下の亂れは皆是より生ずる。何が故に、奧樣は女中の心になり得ないのであるか。何が故に、姑は嫁の心になり得ないのであるか。何が故に、主人は家來の心になり得ないのであるか。藝者に向つては、藝者の心になつて法を說き、娼婦に向つては娼婦の心になつて法を說き、惡魔外道には惡魔外道の心になつて法を說く。之を神通自在といふのである。まことに、吾々は、一心に觀世音菩薩を供養しなければなりません。

人となるといふことは、だから、人の心になるといふことであります。

K.

二

光炎菩薩、單身山を下りたまふ。途上人なし。深山を出でて、森林に來りたまひしとき、童顏鶴髮の老翁忽然としてその面前に立てり。夙にその精舍を去つて、林間に草根を求むる老翁なりき。翁、菩薩を見て告げて云く、

「旅人は未見の人にあらず、幾年の昔なりけん、この道を過りたるは、まさしく彼なりき、彼は光炎子と呼べり、されど、その人今や別人の如し。

その時よ、汝は汝の灰を山に運び行けり。かゝり

13　14

し汝は、今や、汝の火を谷に持ち往かんと欲するか、汝は火を放てるものゝ罰を恐れずや。

然り、われは能く、今の光炎子の人となりを解す。彼の眼は清らかなり、彼の唇には厭ふべきところなし、彼は舞ふ人の如く踊り往く。

然り光炎子は別人となれり、光炎子は兒重となれり。光炎子は覺めたる人なり。覺めたる汝よ、かの眠れる人に向つて、今や何を爲さんと欲するや。

汝の山中に孤獨を樂しめるや、猶ほ渺茫たる大海の中に遊べるが如かりき、然り、汝は海に遊べるな

15　16　17

りき、海に遊びたる汝は、再び陸に上らんと欲するか、憫むべきかな、汝は再び佻々として汝の形骸を曳かんと欲するか、憫むべきかな。」

宗教は心の方向變換である。別人の如くなるのが至當である。否な〳〵、別人にならずにはゐられないのである。著者の一代を以て言へば、その始め、ショーペンハウエルやワーグネルを理想としてゐた形而上學者の時が第一期、それより懐疑的となり實證學者となつたのが第二期、再轉して、この如是經の說法になつたときが第三期と云はれてゐるが、所謂第三期の新教義は、懐疑より熱烈な信念に移つてから後の沙汰で、超人の教・久遠輪廻の教が、就中最も大切な法である、しかし、かやうに個

條を立てて、兎や角と、義を立てるのは、著者の本志でないことは、追々本文を讀めば、分明することであります。今は先づ、著者の確立せる信念が、あらゆる宗教の信者や開祖に於けると同じく、著者をして、些の疑惑なく些の畏懼なく、金剛不壞の妙境に到らしめたものと信ずればよい。

昔、憧憬してゐた理想(火)が雲散霧消したのを灰に譬へ、新理想新信念を火に譬へたのである。迷を迷とも知らないで、うかりひよんと酔生夢死してゐる衆生に、新しき法を說くべく、其眠を醒ますのは、火を彼等の心家に放つと一般である。放火者は罰を受くる如く、衆生の心に火を點ずる菩薩は、いつの世何れの國でも、刀杖瓦石の難は免れ難い。

火と言ひ、灰と言ふのは、古代エヂプトの傳說中にある怪鳥

フエニクス(Phönix)より來る。フエニクスは、己れ自ら己れを燒いた灰の中より、幾たびも久遠劫にわたりて、蘇生復活せんが爲に、各五百年毎に自分を燒くと云ふ。久遠青春化の象徴であります。

わが恩師ケーベル先生は、人を見るには眼を以てせよ、見よ、彼は死んだ眼を有つてゐる。某の眼は病的だなど評せられて、よく吾等を笑はせられたものであつたが、今もその如くで、心の顯現は、眼に出で、唇に出で、歩く姿にまでも及ぶものぢや。踊の一字は、著者の最も好きな文字の一つで、これから度々出て來る。疑懼つかない態度を表現し得て面白い。所謂、信甚深法無疑懼の趣である。お互も修行一番、この一節のやうな人にならうではござりませぬか。眼は濁りかすんで力なく、唇は見るも嫌な、歩く姿は蟇蛙ではイヤハヤ。

兒童は天眞の姿、嫌擇なき自然の趣である。委しくは本品第一章に出ます。

悠々自適、山に遊び海に逃れてゐればこそ、人の毀譽褒貶をよそに、風月を友として、何不自由なく暮らせるものを、何を好んで、虎狼の巷に身を投ぜんとはするぞ。危いかな危いかな。

惟ふにこの老聖者、專ら道行を修め、身を修めて自から翫び、山林に放蕩して、心を淡泊に歸するの人、佛敎で謂ふ聲聞緣覺の境涯を出で得ざる小乘の徒である。維摩經に、舍利弗が、林中に於いて樹下に宴坐してゐると、維摩居士が來て、

唯舍利弗、必ずしも是坐するを以て宴坐と爲さざれ。(中略)道法を捨てずして、凡夫の事を現ずる、是を宴坐と爲す。……煩惱

を斷ぜずして涅槃に入る、是を宴坐と爲す。

と一喝を食はすことが書いてあるが、この老翁も、維摩の大喝を喫すべき小乘の行人である。

と云つたからつて、小智小才の吾輩如き分際で、この老聖者を貶黜するのではない。佛祖の智見に照して、論じて見ただけのことである。一休和尚の法語に、

黄衣下多名利　我要兒孫滅大燈

とある。名利を追ふ人のみの世の中では、小乘の修行者は、いかばかり貴いことであらうぞ。寒巖に隱栖して容貌枯悴し、布襦零落して風狂の士の如く、生廉死亦樂と吟じ、虛名定無益と喝する寒山・拾得の如き隱者は、これそも〳〵小乘の傑か。大乘の雄か。大小乘豈に知り易からんや。咄咄。

光炎菩薩答へて曰く、「われは人を愛す。」

聖者の云く、「果して然らば、われは何が故に世を遁れて無人の境を樂しめりと思ふや。こはわが餘りに人を愛したるが爲ならずや。

今のわれは、人を愛せずして神を愛す。人はあまりに圓滿を缺く。われ若し人を愛せざるべからずんば、われ恐らくは死せん。」

光炎菩薩答へて曰く、「愛について、われ、そもそも何をか語れる。われは、人々に法施をなさん。」

聖者の云く、「人には何物をも與ふることなかれ。寧ろ如かんや、人より或るものを奪ひ取りて、人と與に之を有せんには。汝若し、かくして自ら樂しまば、人は最も樂しと爲さん。

汝若し强ひて與へんと思はば、人の請ふを待ちて、財施をなせ。されど財施以上を惠むことなかれ。」

光炎菩薩答へて曰く、「あらず聖者。われは財施をなさず。われは、財施をなすが如き貧しきものにあらざればなり。」

平等門の高處から云へば、一句一偈の法も、一錢一草の財も

その慈種善根の布施たるに於いて、毫も上下輕重の別を立つべき理はない、固より、其物の輕きを嫌はず、其功の實なるべきを貴ぶべしであるが、前にも云ふ如く、法施に限りなく、財施には限りあり。人々分上、各、その長に準じて施すところあるべしぢや。

今の言葉でいへば、かの老聖者は所謂理想家である。短兵急に自家の樹立せる理想のままに、人類を化度せんとして、物の見事に失敗した揚句の果てが、人間なるものに愛想を盡かして、山に遁れざるを得なくなつた人なのである。他の人間に愛想を盡かしたのか、自分といふ人間の無能無力にあきれ果てたのか、そこは分らぬが、總じて理想々々で、むきになつていきり立つ人々の末路は。大抵。斯うしたものである。

下世話に云へば。可愛さ餘つて嫌さが百倍といふ格で、極端の愛人家は、極端の厭人家となつた譯で、そこで大悟一番、人間なるものに見切をつけて了つた。菩薩が「人を愛す」と云つたのを聞いて、菩薩も、畢竟、吾が轍を踏むかと、心中憫を催して諫言とも見るべきが、以上の聖者の言であります。

人から離れた聖者は、山に入りて神をのみ信賴とする人となつた。この境涯に到達し得るのも、實は、容易の事ではない筈ぢや。所謂全身完膚なしで、その心の傷を想へば、噫涙がこぼれる。

聖者惟へらく、人には何物も與へないがよい、それよりも、人から或る物を取つて人と與にそれを有して居ればよいと。言ふこゝろは、世相のままにうち棄てて置け。人の世に、現在行はれてゐる道德・習慣・風俗・宗教、どれもこれも、あるがまに〳〵成るがまに〳〵、それをまた自分の物とも思うて、人と與に暮らし行けよ、かくせば天下平かならん、煩悶も焦慮も無い筈でほどざらぬか。それではあまりに物足りない、是非何とかしたいと、あらば、財を惠んで人を助けよ、それも、こちらからぶしつけにさし出しては、却つて人の怒を買ふ道理、他人が哀願するを待つて後に致すことぢや、と諭したのであります。

以下は譯者の一家言であるが、愛の一字については、吾輩大いに說がある、まあ聞いて下さい。兎角、西洋の學問をした人々は、よく、わが日本には、言葉が無い、言靈ふ御國なんぞ、ちやんちやらをかしいわいと、何事によらず言語貧弱國を呼號するのであるが、果して然うであらうか。早い話が、先づ、こ

の愛の一字ぢや。何ぞそれ西洋言語の貧弱なるやで、しみ〴〵情なくなつてしまふ、ばかりでなく、この愛の種々相・種々心に向つて、平等無差別式に、愛の一字を加ふるのが、そも〳〵西洋文明が今日の大破綻を來たした源由とさへ、吾輩は考へるのである。

ここの本文も、直譯式に、人を愛す、神を愛す、と原文のまを出して置いたが、何だか、自分でも、不好な氣がする。こゝの人を愛すといふ文字は、英語の片言を覺えた青年男女が口を尖らして、「あなた私を愛してくれますか」などと云ふ、嘔吐を催さしめるやうな氣障千萬な愛の意味とは、天地の相違があるのですぞ。氣を附けて下さい。

本文の愛の意味を、佛敎では、或は哀愍といひ、或は矜哀といひ、或は大慈大悲といひ、或は慈悲といひ、或は慈念といふ。法華經に、「衆生を慈念すること猶ほ赤子の如し」とあり。

無量壽經には。

「我れ汝等諸天人民を哀愍すること父母の子を念ふよりも甚し。」

「如來無蓋の大悲を以て、三界を矜哀す。」

とあるが、如き卽ちその一例であります。

人を愛すといふはまだ可いとして、神を愛すといふに至つては實に言語道斷である。吾々日本人は、親を愛すとさへ言はぬ筈ぢや。父母に事ふるといつたり、父母に孝するといつたり、父母を敬するとこそいへ、父母を愛するとは、苟くも子としては、金輪際言はぬでないか。まして況んや、神を愛すなどとは、沙汰の限りである。假に私が

今、人前で、恐れ多くも、われ、天照皇大神を愛すと云つたら、どうだ、直ちに鐵拳者であらう。われ、阿彌陀佛を愛すと云つたらどうだ、心ある人々の呵喝を受けずには濟むまい。よしや他人は、聞き逃がし見逃がしにしてくれるにせよ、われと我が淺間しい感じを起すのは、どうしたものぢや、吾々日本人の頭の中には、はつきり區劃の立つた、微妙な感情が巣食うてゐるからである、

然るに西洋に於ては、少くとも言葉の上では、とんとかゝる區別がない。神様に向つても、親に向つても、衆生に向つても、子に向つても、夫からも妻からも、兄からも弟からも、情婦からも、奴婢からも、猫も杓子も、どいつもこいつも、唯もう愛・愛・愛・ぢや。何だ、タアイもないと云ひたくなる。所が、なかなかタアイがあるので、毫釐の差が天地懸絶の大騒動を惹き起してゐるから恐ろしいのである。

クリストの教にある愛の一字が、どういふ意味合のものであつたかは暫らく措く。件の愛の一字で、人間の複雜な感情を一貫した結果がどうである。人間といふ奴は、甚だ勝手のものぢや。種々の愛がある中で最も分りのよいのは、人間の愛慾・戀慾・性慾であるところから、男女の愛を中心として、一切の愛を見るやうになり、知るやうになり、行ふやうになつた。勿論何處の國、何時の世からかは知らぬが、斯くなつたのか、歴史上の事實だから仕方がない。そこで、それ、新舊兩宗教の爭鬪なるものが、政治上教權上の表面義は云はずもあれ、内面的には、クリストの奪ひ合ひやマリアのひつたくり合ひとなり、新教の

女がクリストを情夫として夢見たり、舊教の男がマリアを女房にしたりして、愛と敬をこんがらせて、味噌も糞も一列平等、イヤハヤ恐れ入つた始末ぢや。そこまでは、まだ御勝手次第、餘所事として見ぬふりも出來やうといふものだが、さて次に、これがいよ〳〵、宗教の教道德の風となる場合、どんな咄々怪々事が起るとするぞ。「汝他人を愛すること、猶ほ汝の夫の如くせよ」、「汝、他人の妻を愛すること、猶ほ汝の妻の如くせよ」、となつたらどうぢや。男女の愛は、父母が子を愛するのとは違ふ。この愛の反面には憎がある。戀の反面には妬がある。まかり間違へば、昨日の偕老同穴は、今日の不俱戴天の仇敵である。人々相憎み、人々相噬む。これで四海兄弟も同胞もあるかい。これで博愛とは何の事だ。これで神の愛とは何の意味だ。氣を附けて貰はねば、傍が迷惑する。

個人同志の間なら、まだ可い。これが國といふ個體になつたら、どうである。まるで女敵を討つやうな勢ひで、他國を侵逼したり、迫害したり、殘忍な殺戮さへするに至るではないか。古往今來、愛慾から起る殺戮ほど殘忍なるは他にない。これと同じ殘忍性を一國一民が有するのは、西洋に限る。論より證據、東洋には、殘忍酷薄を極めた宗教戰爭なるものは、未だ曾て無いではないか。

これは勿論、クリストの教の本義ではあるまい。が、言葉の不足はかやうな恐ろしい事になる、イヤなつてゐるのである。吾輩は敢て、日本の基督教徒に告げる。「私は神を愛す」といふやうな貧弱下賤な言語を用ひることを已めて戴きたい。日本人た

るものゝ面汚しであるからで。

然らば、東洋殊に日本の教はどうぢや。論評があまりに岐路に入つた。之は、後章に譲つて置いて、さて次は、

聖者、光炎菩薩を見て笑つて云く、「さらば汝、心を用ひて、衆生をして汝の法寶を享けしめよ。彼等は成心以て道士を迎ふればなり。彼等に布施せんがために趣く吾等をば、彼等は信ぜざればなり。

街上を歩む吾等の跫音は、彼等のあまりに氣味悪く感ずるところなり。太陽未だ出でざるに先だつこと遠く、人一人、逍遙漫歩、彼等が枕頭夜半の夢を

驚かす時のそれの如く、彼等恐らく、吾等を見て、互に相顧み相問ひ、「盜兒何處に行くか」と云はん。

「氣味惡く」の一語絶妙。盜の譬喩も面白い。衆生が惰眠を貪つてゐるとは、在來の教に安住してゐる狀態を云ふ。時代の先覺者は何時も、衆生の夢を驚かす夜歩き人である。叛逆者といはれたり、罪人を以て刑せられたりするのも、その爲である。まことに妥當な譬喩であります。

法然も親鸞も日蓮も、皆各〻その時その世に於て、氣味の惡い人々であつたに相違ない。志士仁人の人々、何れも然らざるはない。

汝光炎子、人の間に往くことなかれ、而うしてこ

の森に遊びたまへ。人の間に趣かんよりも寧ろ禽獸の間に遊ばずや。汝は、何が故に、余の如く、熊の中に熊となり、鳥の中に鳥となるを欲せざるや。」

聖者の見地からいへば、禽獸の方が人間よりも友とし易いのであらう。げに〳〵觀來れば、人ほど恐ろしい動物はないのであるから。

光炎菩薩問うて曰く、「然らば則ち、聖者、此處に遊びて何をか爲したまふ。」

聖者答へて云く、「われは歌を作りて之を吟ずるのみ。われ歌を作らば、或は泣き、或は笑ひ、或は嘯く。此の如きのみ。かくして、われは神を讃嘆す。

或は歌ひ、或は笑ひ、或は嘯き、われは、わが神を讃嘆す。わが爲すところ此の如し。さもあらばあれ、汝はわれに何物を與ふるや。」

光炎菩薩、この語を聞きて、聖者に一揖して曰く、「われ能く、上人に何物をか呈し得ん。われもまた、上人より、何物をも享くるなからんがために、速に茲を去らん。」―此の如くして、老翁と中年の人とは、呵々大笑して袖を別ちぬ。その笑ふや、二人の男兒が相笑ふが如かりき。

光炎菩薩再び孤獨の身となりしこき、われこわが心に語つて曰く、「かの老上人は久しく人の世を遁れたるがために、神の死せるを毛頭聞かざるならんが、かゝることの有り得べきことか、不可思議なるかな。」

道同じからざれば、相論じ相議するも何の甲斐があるべき。君子の相別るゝや、まことに淡々水の如し、綺麗さつぱりしたものではある。與へるも受くるもない筈ぢや。著者自身も、眞の信仰人とは睦まじく交はることが出來た。著者の敵とせるところは、傳習的宗教や教會に阿附盲從して、何等の信仰味も徹底味もない薄つぺらな見え信者達であつたのであります。

菩薩と聖者とが、中年と老年とに、はつきり書き分てあるのも面白い。呵々大笑して、各〻好むところに隨はんと云つたやうに相別れるのも面白い。

老聖者が、獨り山林に住して、歌を詠じてわれの神を讃嘆するのは貴い。かくても世は住めるものか。

上田秋成の雨月物語に、破戒無慚の一惡僧が快庵禪師の教化を蒙り、一ケ年の間、破れ寺の庭に坐して、禪師から賜つた證道の歌、「明月照松風吹、永夜清宵何所爲」を唱へ續けて遂に成佛せることが書いてあるが、かくても、世は住めるものか。

白隱禪師の師であつたと傳へられてゐる、白幽子の事を、近世畸人傳の著者は、「洛東白川の山中に巖居せる人あり、白幽子と名づく、壽は二百歳に過ぎたらんやも知るべからず云々」と、或人のいふを聞きて、白隱、山深く入ること二里ばかり、樵夫

に路を尋ね、雲を分け岩を傳ひ、辛くして至りつゝ見れば、洞口に蘆の簾を掛けたり。透間よりうかゞへば、目を閉ぢ端坐す。蒼髪は垂れて膝に至り、朱顔うるはしくして棗の如し。机上に中庸・老子・金剛經を置くのみして、飲食の器・夜の衾も見えず。高風清致人間にあらず」と書し、その人の實有は論なしと、結んでゐる。昔は、かゝる人もありけらし。高趣高風仰ぐべし、貴ぶべし。

神の死せるを知らずと云つて、老翁を氣の毒がり不思議がる菩薩の心、これは何と解かうぞ。

西洋の評家達にも、この一句を以て、著者を做大妄想狂だと罵つた人もある位、世を驚かした言葉である。本品第二編に出る、「若し神々なるもの在さば、人誰か神とならずに居られやうぞ、だから神は無い」といふ無神論めいた一節と與に、大いにクリスト教徒の怒りを招くところである。

神は死んだ――恐ろしい言葉である。不可解の言葉である。本來、生死なき神が、死ぬるとは何事だ、と先づ一應は、文字の上から、非難を加へずには居られないのである、が、さて、眼光紙背に徹して甚深の意義を汲めば、菩薩が心眼の、高大無邊なるところが伺はれる。總じて、宗教の事たる、人間の不完全な言葉では、言ひ現はされないことばかりである。だから、佛教で、拈華微笑といひ、不立文字といひ、維摩の一默といふが如き、何れも、言語道斷・言詮不及の境地をば、これまたやはり、不完全な人間の言葉で、諷示したに外ならない。

人を嫌うて山に逃れた聖者は、人を愛せずして神を愛すと云

ふ。神とは何ぞ、人とは何ぞや。神と人とを峻別して、十萬億土も啻ならざるばかり、客觀的に、相對的に、我他彼此を建立せるところが、聖者の小乘的見地である。我も人も神の子にあらずや、國土山川皆神の子にあらずや。一信到底するとき、魚鳥もとよりわが友なり、草木もとよりわが兄弟なり、何をか厭ひ、何をか憎まん。蘇東坡の讃佛偈に、「佛以大圓覺、充滿河沙界、我以顚倒想、出沒生死中」とある、一念彌陀佛、顚倒の想ひを脱し得れば、我則ち佛と同じぢや。至道無難、唯嫌揀擇と云ふのも同じ道理を說いたものである。然るに今、かの老聖者、是非をのがれて是非にまじけるの妙諦を知らず、有無をはなれて有無にまじはるの大乘地に達せず、取捨憎愛に囚はれて、あくまで迷悟凡聖、是非得失の兩邊に滯ほりて、自由無碍の一行三昧に達することが出來ない。何としたことぞや。なまなかに、クリスト世に出でず、神といふものを說くことなかつせば、かゝる迷も生ぜざらんものを、あたら自作自造の神に囚はれて、無繩自縛の牢獄裡に呻吟することのあはれさよ。聖者の所謂己れの神は、疾くの昔に死んでるぞ――これが菩薩の心である。

畢竟この老聖者は大死底の人である。大死底の人却つて活するの機を知らぬ人である。果然、彼の神は死んでるではないか。然るに、大死一番、大活現成して、神人一如の虛空藏より躍り出で、退歩却來、下化衆生の大獅子吼を爲すべく、一たび厭うた穢土に還相廻向するのが光炎菩薩であります。

三

光炎菩薩、森また森を經て、始めて街上に立ち、偶ま、綱渡を見んとて集へる大衆に逢ひたまふ。乃ち大衆に說いて曰く

「われ、汝等に超人(佛)を說かん。人は今の人に克つて、更に向上進化すべきものなり。汝等は人間の向上進化のために、何を爲したりや。

天地萬物は、皆已れの上に或るものを作りて進みたるなり。汝等は大いなる潮の干潮となりて、人の進化を企てんよりも、寧ろ禽獸に退化せんと欲する

か。

人よりいへば、かの猿は何の狀ぞ。笑ふべく、悲しむべく、恥づべきものにあらずや。超人の人に於ける、また此の如し。笑ふべく、悲しむべく、恥づべきは今の人なり。

汝等は、蟲より人となるべき道を辿りて進めり。されば、汝等の身心の多くは、今猶ほ蟲にあらずや。汝等は嘗て猿たりき。されば、今も猶ほ人は、かの猿の類よりも猿たるに近し。

汝等のうちの最も賢きものも、唯草木と妖怪との

醜き雜種たるに過ぎず。さればとて、われ焉んぞ、汝等をして、かの草木たり・妖怪たらしむるを好まんや。

いよ〳〵光炎菩薩の辻説法であります。日蓮上人の鎌倉に於ける辻説法を想ひうかべしぢや。日蓮は、例の有名な四箇格言を以て、拆伏の火蓋を切つたのであるが、今や光炎菩薩超人と此土の意義とを振りかざして、現前の迷妄をうち破らんとするのであります。

超人——從來に、あまり見慣ない文字であるため、多くの人が、眼を睜つて驚くのであるが、別に驚くには當らない。何の不思議もないことであります。菩薩の法は、あくまで心の問題を敎へるのであります、無明の偸心に眼覺めて、顚倒想を解脫することを敎へるのであります。道は近きにあり、之を遠きに求む。外慕外向の焦慮を已めて、自家の脚下に眼を着けて見よ。意馬心猿の狂ひ廻る穢い有樣を照見したら、蟲けらにも劣り、猿にも恥づべきのが、吾々の日常の生活振りではないか。超人とは、かやうな淺間しい人間、自己心頭上に隱顯する淺間しい人間を超越するの意味に外ならぬ。

西洋では、超人といふ言葉は、ゲエテのフアウスト第一卷に出たのがそも〳〵の始めであるさうであるから、よほど新しい言葉である、それだけに耳慣ない變な語に響くのであるが、わが佛敎では、遠くの昔からこの超の字が、經文等に盛んに使はれてゐるので、この方から合點すると、何の苦もなく、その意

味合が分るのであります。

大無量壽經には、「阿彌陀佛の超世無上の本願」と說かれ、親鸞聖人の正信偈には「稀有の大弘誓を超發し」とあり、或は「一超直入如來地」と云ふ禪語もある。

ところで、超人の下に括弧をなして、(佛)の一語を挿んだのは譯者の附言であるが、多くの讀者は、恐らく讀下一番驚心駭魄せられることゝ察する。が、譯者の信念の中には、これが毛頭牽强附會の無理こじつけに非ずして、實に妙不可思議の一致融合である、と考へられるのみならず、斯くならずんば、「如是經」の一書は、少くとも譯者の私だけには、宇宙間無用の囈語たるに過ぎないとまで思はれるのであります。

そも〳〵、原著者は、この「如是經」の一書を以て、既に前にも

解說した通り、一切衆生必可讀の書と銘打つて世に出した以上、萬人が、此の所說の法を聞いて、萬人悉く、超人となるべき恩澤を蒙らねば、何の所詮もないことである。而して、その著者は、神あつても神となれぬ敎に愛想をつかして神を無みした無神論者である以上、超人あつて超人となれぬ敎を說かう筈が無い。然らば則ち、超人とは何であるか。

超人とは、佛語を借りて云へば、一超直入無上道の謂である。親鸞の正信偈に所謂、能發一念喜愛心・不斷煩惱得涅槃、の謂でなければならぬ、人生の迷妄から解脫した無碍人の謂であらねばならぬ。世の迷を超出した解脫人の謂であらねばならぬ。親鸞聖人の敎行信證には、堅超橫超の文字を以て、自力門他力門を區別し、聖道自力敎のうち華嚴天台等の實大乘敎を堅超と名

づけ、願成就一實圓滿の眞教眞宗の他力教を横超と名づけ、品位階次を經て修行得道するのを竪の一字で現はし、一念須臾の頃に、金剛の信心を獲得する者の、横さまに五惡趣を超截し、すみやかに生死の大海を越えて無上道に至る所謂卽得往生住不退轉の不可思議解脫を横の一字で說かれてあるが、竪でも横でも、一切衆生が生死の大海を超ゆるが一大事である。卽ち一切衆生成佛が一大事である。超人といふ新しい言葉に眩惑してはならぬ。

己れに克つとは、必ずしも世間通途の言ふ如く、自己一切の煩惱にうち克つの意味ではない。心の欲するところに從うて、矩を踰えずと云つたやうな境涯は、古の聖人でも、齡七十にして始めて成し得る至難事である。凡夫の吾等がなか〳〵一足飛びに學び得らるべき道ではない。自己の煩惱を斷滅せねば佛となれぬのなら、佛法といふものも超人といふものも、共に均しく、一向に難有くない教である。煩惱を斷じ盡すといふも、勿論行爲の上にのみの沙汰ではなく、吾々が心の上に日夜刻々露現する千種萬種の穢い醜い映像についての沙汰である。これを斷滅し盡すなどゝいふことは、人間にしては或は、有り得べからざる事かも知れぬ。少くとも、私一身に鑑みて言へば、未來永劫出來さうには思はれぬ。又、釋迦ともあらう方が、何でさやうな殘酷な教法を人類に垂れたまはうぞ。況んや光炎菩薩にして見れば、五濁惡世の今日、煩惱熾盛此上もない現代に向つて、救世の大願を立てやうとの說法である。煩惱を滅盡せよなどゝ說かう筈がない。然らば、己に克つとは如何なる意味であ

らうか、語簡にして意深しである。少しく、譯者の體驗を說いて見よう。

己に克つとは、自己省察の結果、己れの煩惱に眼覺めることである。己れの愚痴を自覺することである。自分の淺間しさにあきれはてることである。三界唯吾一人のみありて、しかもその一人を何うすることも出來なくなつた。切破つまつたことである。言ひ換れば、內見內照徹底的に自己を知ることである。自覺することである。決して、他人や古人と、比較對照しての優劣論などでは勿論ない。そんな生溫い餘裕などの毛頭無い、生くるか死ぬるかの刹那である。自殺もしかねまじき程に自分に對する愛想づかしの一瞬間のことである。諸君想へ、自己を知らずして、己れに克つといふは、無意義ではないか。己れを善しとして、己に克つといふことは、無用の沙汰ではないか。己れを賢として、己れに克つといふも、有り得べからざることではないか。之を古人の言葉を假りて言へば、善導大師の所謂、「自身は現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に沒し常に流轉して、出離の緣あることなし、」と深く信知することである。

かくの如く信知自覺するが、即ち宗敎心の露現といふべきもので、この一刹那、即ち克己復禮の往生を遂ぐるのである。自力門でも他力門でも、先づ第一に自己省察をやかましく言ふのは當然といはねばならぬ。己の闇愚を徹見して、この土を穢土と觀ずるか、いかばかり、道に進む者に大切であるかを說くのが、次節の眼目である。

見よ、この土は穢土ではないか。地に住む人間の有樣を觀よ。

猿の如く、蟲の如し。否々、猿以上の猿根性を有し、蟲以上の蟲根性を有するにあらずや。佛眼から見られたなら、人間の賢者といふものも、英雄といふものも、憫然至極のものであらう。

今、光炎菩薩、世の賢者は植物と妖姪の雜種だと說く。一語、世の賢者ぶるものゝ肝膽を寒からしむる大叱咤である。

マーテルリンクは、その名著「花の智慧」に於いて、植物の智慧の人間以上なるを實見して、人間も植物だけの智慧があつたなら、も少し氣の利いた生活をするのであらうに、と歎聲を放つてゐるが、眞に人間ほど、あきれ返つた動物は無いのかも知れない。

聞け、われ汝等に超人(佛)を說かん。

超人(佛)は地の意義なり。汝等希くば、超人(佛)は地の意義なることを欲するところあれ。

わが同胞よ、われ切に汝等に冀ふ、汝等この地に忠なれ、而して天のもろ〳〵の希望を談ずる者を信ずることなかれ。彼等は毒害者なり、彼等自から之を識るや否や、そはわが問ふところにあらず。

彼等は生を侮る人なり、死にゆく人なり、彼等自から毒を飲ませられし人なり。地は彼等に倦みぬ。かるが故に彼等、あの世に去り往くが可きなり。

むかしは、神に背くを以て最大の背德となしぬ。

然れども、その神は死せり。神と共にかゝる背徳者もまた死せり。今や、地に背くが最も恐るべきなり、地の意義よりも高く、不可知物(神)の膿を重んずるが最も恐るべきなり。

まことに超人は地の意義である。諸君、以上の言を他人事にして、西人の一人生觀などゝ思つては、何の所詮も無いことである。人々各自分の脚下を見るがよい。吾等、會ひ難き人界に生を享けたのは、何の爲ぞ、生を享けて今、何を爲しつゝあるぞ。死しての後は如何。誰しも茫々然として、歸趣に迷はざるを得ないではないか。

苟くも、宗教と名のつく程のものならば、それがいかなる教義の上に立つにもせよ、一切衆生をして轉迷開悟せしめ、この粉々擾々たる世界の大渦巻の中に於いて、大船に乘つたやうな氣持で、遊戯三昧に、呵々大笑して、日々是好日式に、業海を乘つ切らせる底のものでなくてはならぬ筈であるが、さてどうしたものか、むかしから厭世教とやら云ふものがあつて、この地を呪詛ふやうな教が、隨分出て來たものだ。

かゝる厭世的・遁世的・自殺的宗教に、徹底的に止めを刺すべく、現はれ出たのが、光炎菩薩の超人教であります。

超人は卽ち佛である。佛の出世が一大事因緣である如く、佛の教を信じて、吾等が信念の上に、佛心の顯現を體得するのが卽ち地の意義である。

地に忠なれの大獅子吼は、吾等が大悟の後、信仰穫得の後には、當然遵奉せねばならぬ無上命令――と云はんよりも寧ろ、影の形に添ふ如き不卽不離の因緣果であつて、わが佛敎の上では、何等珍らしい敎ではないのであるが、基督敎國では、これが破天荒の毒語の如くに響いたのであるから可笑しいのである。

神は死せりの一句は、既に前にも出てゐる。總じて宗敎上の問題なるものは、信念信仰上の問題であつて、斷じて辯證や分析や批判の問題ではない。神は死せりといふのは、キリスト敎の神を光炎菩薩が信じなかつたからのことで、信ぜざるがゆゑに神死し、信ずるがゆゑに超人(佛)生る、此の如きのみである。

不可知物の腹――本品に、實在の腹といふ言葉あり。人の腹を探ると同じ意味合で、多少の可笑味がある。

ゲーテ先生の宗敎觀は、こゝの說法と相似て。頗る興趣の深いものであるから、先生が門弟子エケルマンに談じた一節を譯して見よう。

「余は來世を信ずるの幸福を得たいと思ふ、のみならず、來世の生を望まざる人々は、この世の生に於ても既に死せる人々だと言ひたい。併しながら、かゝる不可解の事どもは、日常の觀察や思索の題目となるべく、あまりに緣遠きかけはなれたものである。世に愚な婦人達があつて、不死不滅を信じ得たるを誇り顏に、此の點に就いて、先生は如何の御考へですかなどゝ、馬鹿らしくも、余を試驗に來たものさ。余はその時、「この一生畢つてから後、來世の生活が吾々を幸福にしてくれるなら、難有いことですな、しかし余は、この世で來世の祝福を信じてゐ

た人々には、あの世では會ひたくありませんね。何故つてあなた、若し一緒に御會ひでもしやうものなら、それこそ大變なことになりませう、信者であつた人々は寄つてたかつて余の所へ來て、それ御覽遊ばせな私共が兼々申し上げてゐたことは本當でございましたでせう、當りましたでせう、なんどゝ仰しやるに極つてる。それでは、天國へ參つて、又もや、倦怠盡しで欠伸の仕通しですから」と言つたら、婦人達に憤られて了つたよ。

一體、不死不滅の考へなどに一生懸命になるのは、貴族の人々や何の用もなくのらりくらりして徒然に暮らしてゐる婦女子に限るね。此の世で既に相當な人間であり。またそれであるから、努力せねばならず、奮闘せねばならず、活動せねばならない有爲な人間は、あの世の事には大安住して、この世に於いて勤勉精進して有益な事業をする。

「人間が七十五歳にもなると、時折は死の事を考へることはある。私は、吾々の心は全く滅すべからざる性質のものであると確信して疑はないから、死に就いては、余は全く安心立命してゐる。吾々の心は久遠劫から久遠劫に渉つて活き續くものである。例へば、日輪の如きものか、人間の肉眼には、唯沈み行くやうに見えるが、實は沈み行くのではなくして絶えず照耀してゐるのである。」

面白い言葉であります。

嘗ては、靈、肉を賤しみぬ。故に當時にありては、この輕侮を以て最も高きものと思へり。肉をして痩

せしめ、肉をして凄からしめ、肉をして飢えしむるは、靈の欲せるところなりき。かくの如くして、靈は肉と地とを遁れむと思へり。

嗚呼、その靈こそは、自ら瘦せ、自ら凄く、自ら飢えたるにあらずや。殘忍はかゝる靈の快樂とするところなりき。

然れどもわが同胞よ。汝等の肉は汝等の靈について何をか告ぐるや。汝等の靈は貧しく、穢く、樂しんで傷きものなり。

難解の文字は無い。吾等の身體にして物言ひ得べくんば、洵に、この四七節の如く、吾等の心を罵しつて、貧しく穢いもので、樂しむも束の間の、憫むべき傷いものだ、と歎くこと、必然である。

釋迦牟尼佛も、その成道前に、多年の難行苦行の、眞の修道の法にあらざるを大悟せられたのであつた。親鸞聖人が修行時代を、存覺上人は、その獄德文に於いて、「定水を凝らすと雖も識浪頻りに動き、心月を觀ずと雖も妄雲猶ほ覆ふ。而るに一息追がざれば千載に長く往く。何ぞ浮生の交樂を貪つて、徒らに假名の修學に疲れん、須らく勢利を抛つて、直ちに出離を悕ふべしと」書かれてあるが、まことに聖人の心境を描き來つて絶妙といふべしである。

更に進んで、聖人の肉食妻帯が、いかなる信念の上から出たものであるかを想ふとき、こゝに書かれてある菩薩の言と相對比して、聖人の人間性の自覺が、いかばかり深刻であつたかゞ窺はれると思ふ。

いくら身を苦しめても靈が向上せぬとなるとき、律法主義の修行が無意味にある。釋尊然り、親鸞聖人また然りでありました。

まことに人は穢き河なり。吾等は海ならざるべからず。穢き河流を享けて、もろ〳〵の汚穢を淨化するは、海なればなり。

聞け、われ汝等に超人(佛)を說かん。超人(佛)こそは

實にかゝる海なれ。超人(佛)の海に歸入し見よ。汝等が大いなる自侮の念は、直ちにその底に沈み往かん。

この河と海の譬は、佛典には無數に出てゐる。或は河を凡夫となし、海を佛となし、或は河を煩惱となし海を菩提となし、或は河を生死に譬へ海を涅槃に譬ふ。その意全く以上二節と符節を合するが如しであるが、その數ある中にも、親鸞聖人の和讃が、最も簡明直截であるから、その二三首を拜借して見ませう。

本願力にあひぬれば　むなしくすぐる人ぞなき
功德の寶海みち〳〵て　煩惱の濁水へだてなし

名號不思議の海水は　逆謗の屍骸もとゞまらず
衆惡の萬川歸しぬれば　功德のうしほに一味なり
盡十方無碍光の　大悲大願の海水に
煩惱の衆流歸しぬれば　智慧のうしほに一味なり
彌陀の智願海水に　他力の信心いりぬれば
眞實報土のならひにて　煩惱菩提一味なり
彌陀智願の廣海に　凡夫善惡の心水も
歸入しぬればすなはちに　大悲心とぞ轉ずなる

讀誦幾遍、甚深美妙の數を仰ぐべしである。

凡夫の自侮の念が沈み往くとは、佛語に所謂往生の義で、佛凡一體となる妙諦を說いたものに外ならぬ。

汝等が體驗し能ふものゝ最大なるものは何ぞや。大いなる自侮の念の起る時、即ち是なり。汝等の幸福が厭ふべきものとなり。汝等の理性が厭ふべきものとなり、汝等の道德はた厭ふべきものとなれる時。その時よ、汝等は斯く云はん。わが幸福何するものぞ。そは貧しく、穢く、樂しんで傷きものなり。然れども、この幸福だに微つせば、わが生畢竟何の

謂ぞ。

その時よ、汝等は斯く云はん。わが理性何するものぞ。わが理性は、かの獅子の食を求むる如く、智識に渇することありや。あらずあらず、そは貧しく、穢く、樂しんで儚きものなり。

その時よ、汝等は斯く云はん。わが道德何するものぞ。われは未だ曾て、わが道德の爲に熱狂せることなし。嗚呼われは、如何にわが善と惡とに倦みけるよ。一切のそれは、貧しく、穢く、樂しんで儚きものなり。

その時よ、汝等は斯く云はん。わが正義何するものぞ。われは、或は火となり或は炭となれるを覺えず。然れども、かの所謂正しき人は、火にして且つ炭なり。

この一節は文意の解釋を要する。原著者の全集第二卷の六三七節に

「人々の諸の說(意見)は、煩惱から生じ出るものであるが、智慧の怠惰は此等の諸說を化石の如く固定せしめて確說(原則)とならしめる。――然るに絕えず活動して已まざる自由の智慧を已に感得せる人は、不斷の變化進轉を以て、かゝる化石的固定を防ぎ得るし、更に進んで彼若し、渾身思想の雪達磨である場合

は、總じて說などゝ云ふものを建立せずして、唯確實性。若しくは十二分に測度せられた蓋然性を、彼の頭腦中に有するであらう。併しながら、左樣な生一本でなく雜り氣の多いために、或る時は煩惱の火で燃え切つて了ひ、或る時は、智慧の氷で冷え切つて了ふやうな吾々人間なるものは、吾々の上に認むる唯一つの女神として、正義の前に跪きたいと思ふ(正義の爲に熱烈火の如く正義の爲に冷靜水の如くなりたいと思つて)。さて正義の女神に向つて見ると、吾々の煩惱の火は何時も不正であり不純である。それでは正義の女神の御手に觸れることは勿體ないし、女神のうれしげな氣高い微笑は吾々の上には下つて來ない。そこで吾々は、御神體は永遠に見られない埃及の女神イージスの如くに、吾々が生活の神として、正義の神を禮拜する。煩惱の火が吾々を燒き盡さんとする時、恥しさうに、或は懺悔として或は供物として、吾々は唯、吾々の苦痛を神に捧げる外はない。かゝる時、吾々が全く煩惱の爲に燃え切つて炭とならないやうに、吾々を救ひ出してくれるものは、吾々の智慧である。智慧は即ち、正義の女神の供物壇から、此處や彼處へ吾々を連れ出して、石綿で出來た着物の中に吾々を包んでくれる。火中から救ひ出された吾々は、そこで智慧のまに〳〵追ひまくられて、說から說へと、黨論の變化の爲に、變說改論御勝手次第で、總じて裏切られ得るほど一切物の重寶な裏切人として橫行濶步するのである、――しかも惡事を爲したといふ感じなどは、毛頭皆無で。」

これで本文の意味は明瞭になつたことゝ思ふ。即ち、眞の正

しい人は、燃えるも冷えるも正義の爲である。一つにして云へば正義の焰で燃え切つて炭となるのが、天下の志士仁人義人であらう。然るに、凡夫の吾等は、燃ゆるは煩惱の爲め、冷えて唱ふる說は、さもしい心の小さい智慧が、得手勝手に作りこしらへた手前味噌である。

冷熱だけはあつても、冷熱を起す原動力は、義人とは天地の差である。火にもなれず炭にもなれないとあつては、己れ自ら己れを侮らずにはゐられないではないか。

その時よ、汝等は斯く云はん。「わが慈悲何するものぞ。慈悲は、人類を愛する人の、磔刑に處せらる十字架にあらずや。然れども、わが慈悲は磔刑にあらず。」

クリストは愛の福音を說いたが爲に、磔刑に處せられた。極刑に處せられても愛の敎を說くことは已めなかつたところに、彼の人類に對する無限の慈悲・徹底的の愛を見ることが出來るが、吾々の口に唱へ行ひに現はれる同情や慈悲が、果して此の如き徹底至極のものであらか。名聞名利の穢い慈悲ではないか。無上道を說くための不惜身命的大慈悲心が、吾々に有るか何うか。無い、無い。わが慈悲は不惜身命ではない、即ち磔刑にあらずや。淺間しいではないか、自侮の念の起る所以であります。

汝等は既に斯く語れることありや。汝等は既に斯

く叫べることありや。嗚呼われは、汝等の既に斯く叫ぶを聞き得たらむことをこそ願へ。

眞に同歎至極である。大自侮を起す人は稀有なのであるから、歎かざるを得ない譯である。人々悉く皆斯く叫ぶに至るまで、大慈悲の大音聲を常に放ちつゝ居たまふが、阿彌陀佛であると信ずる。

汝等の罪ならで、汝等の滿足、天に呼はる。汝等の罪に於いてすら吝嗇なる汝、天に呼はる。

眞に自己の罪惡に眼が覺めた人にのみ佛智慧は顯現するのである、現狀に滿足して、一切の事に不徹底のまゝで安住してゐる人は、永遠に道に入ることは出來ぬ。大疑の後に大信ありぢ

や。自覺自見の苦悶裡に始めて佛は顯はれたまふのである。「罪に於いてすら吝嗇である」の一句は、誠に一大警句であつて、文字通りに解釋すれば、大罪惡を犯し得ない者の意味である。が、決して世間法式に解してはならぬ。實に宗教的大警策である。

「惡に於いて吝嗇であり、善に於いてすら吝嗇である」と、或一人を評した場合、其一人は、惡にも強くないが、善にさへ強くないと言ふ意味で、大した惡人ではないから善人かと思ふと、善事にかけてさへも大した人物ではないと云つたやうな評し方で、すらの副詞は、一向無理がなく、分り易く、吾等の頭に入るのであるが、今は菩薩、「罪に於てすら」と云ふ、そのすらは「善に於いて吝嗇であり、罪に於てすら吝嗇である」のすらである。世間一般の言ひ方とは丁度あべこべの言び方である。しかも、この

すら即ち原語のSelbstの一字は容易ならざる文字であることを味はねばならぬ。罪に於いてすら吝嗇な者が、天に叫び、神に縋るのは何事だと叱咤してあるのである。罪惡に於いて犯ししぶる者は、世間法で云へば、嘉すべきことではないか、それを不可いと言ふのであるから、難しいのであります。それを一氣に讀み下して、危險思想の如く思ふものは、菩薩の大慈悲心を戴くことは出來ません。

彌陀教に於いて、惡人正機と云はれてあるのは、こゝの文と同一味である。

以上は一應字義の解釋を試みたのであるが、以下少しく、原文の宗教味を說いて見よう

河海の譬の一節と超人の海に歸入し見よ云々の一節(四八・四九)

とを、自侮の個條を列擧した各節の後にあるものと見ると、文意が能く通ずるやうに思ふ。尤も是は、人によつて見方が違ひ、經驗が違ふやうであるから一概には言ひ難い。前にも一寸申して置いた通り、淨土を欣求するのが先で、穢土穢身を厭離するのが後である人もあり、その反對で、厭穢が先で、欣淨が後になる人もある。所謂大自侮は、幸福もつまらない、理性もつまらない、道德もつまらない、慈悲もつまらない、何も歎も下らない、たよりない、貧しく、穢く、樂しみ甲斐もない儚いものとなつてしまつた時の自覺を自評せる一念發起の意味であつて、佛教の語で言へば、我は是れ罪惡生死の凡夫也と徹見することである。この大自侮大自卑の念が起らない限り、金輪際道に入れないと云ふのが菩薩の眞意で、誠に難

有い言葉であります。

然るに、その自侮の念が、超人(佛)の海に歸入する一刹那、その海底に沈み往く、といふのが、極めて難有いので、信仰の妙諦であり、宗教の極致であります。

若し、吾々が自侮の念・自卑の思ひを發起したまゝであつたなら、吾々は永遠に下らない人間のまゝで、苦しみ通しに苦しまねばならぬ、即ち地獄行きの罪人で一生を終らねばならぬ、世の中で何が苦しいと云つたつて、此位苦しいことは他にまたと有り得べきでない。例へば、水に溺れ往くものが、終に救ひの手が來ないで、段々に沈み往く苦しさにも似通へる境涯であらう。溺れる者は藁をも摑む、況んやそれが、大慈大悲の救ひの御手であつたらどうぢや。それを摑まずに居られやうか。

阿彌陀佛の一切衆生を救はずには置かぬの本願、その本願の至心が、吾等煩惱熾盛の凡夫・自侮自卑の罪人に徹した一刹那、吾等は卽得往生住不退轉の位に住す、といふ心を和讃に

超世の悲願ききしより・われらは生死の凡夫かは
有漏の穢身はかはらねど・心は淨土にすみあそふ

と親鸞聖人は讃嘆せられてあるが、超人の海に歸入する意味合は、畢竟、これに外ならぬと信ずるのであります。煩惱のまゝで佛果を得る、これ程貴いことがあらうか。凡夫の心に佛心現はる。これ程難有いことがあらうか。大自侮のまゝで大自尊となる味はひ、天上天下唯我獨卑が天上天下唯我獨尊となる味はひ、到底理屈や議論で解すべくも知るべくもない甚深微妙の法

味を說いて、光炎菩薩は、自侮の念が佛海中に沈み往く、と云はれたのであると信ずるのであります。

大自侮あつて、始めて、此の如き大自尊の境が開けるのであるから、大自侮の一念發起の時が、人間の閱歷體驗し得るかぎりの中の最大事である意味は、自から諸君に解せられるであらう。洵に一大事である。この一大事に遭遇せずして、空しく一生を終る人々が如何に多數であるかを思ふ時、限りなく悲哀の念に打たれます。

碧巖集の第七則の頌に、

三級波高魚化龍　痴人猶戽夜塘水

とある。三級は三段の瀧のことださうですが、魚が龍と化すといふ一句が、此上なく面白いですな。人が超人となる味はひが即ちそれであらうと思ふ。いつ迄も自覺しない人間が即ち痴人なのであらう。

眞の孝子は、自らは孝たることを知らず、眞の忠臣は、自らは忠たる所以を知らない。自分は善人とあると思ふ人に善人はなく、修養が出來たと云ふ人の修養は、それで行き止まりで、もはや進轉の餘地はない。彼是を思ふとき、大自侮の時を最大事の時と絶叫せる一語の難有さを、しみ〴〵感得せざるを得ない。私なども、過去四十八年、之を心得々なかつた赤凡夫でありました、お恥しい次第であります。

猶ほ、これに因める佛典を引用して見ますと、

佛言く、天下の愚人、但人の惡を見て自らの惡を知らず、但自らの善を見て人の善を見ず、己れを智と稱する者は皆智

に非ざるなり、自ら明に處る者は其迷甚だし。〔法律三昧經〕

若し多少聞くことありとて、自ら大なりとして以て人に憍らば、是れ盲の燭を執るが如し、彼を照せども自ら明かならず。〔法句經〕

自己の愚を知る愚人は當に善慧を得べし。自ら智ありと稱す猶ほ獗異鈔の難解の一節を引用して、こゝの意味を明かにしたい。〔出曜經〕

『善人なほもて往生を遂ぐ、いはんや惡人をや。

しかるを世の人常にいはく「惡人なほ往生す、いかにいはんや善人をや」と。この條、一旦その謂あるに似たれども、本願他力の意趣に背けり。

その故は、自力作善の人は、偏に他力をたのむ心缺けたるあひだ、彌陀の本願にあらず、しかれども、自力の心を翻して、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生を遂ぐるなり。

煩惱具足のわれらは、何れの行にても、生死を離るゝことあるべからざるを憐みたまひて願を作したまふ本意、惡人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる惡人最も往生の正因なり、よて「善人だにこそ往生され、まして惡人は、」と仰せ候ひき、と云々。』

この難有い敎が分れば、菩薩の言も分る筈である。

同じく親鸞聖人の、敎行信證に引用されてある淨土論註に、

「彼の安樂淨土に生れんと願ふ者は无上菩提心を發するを要す。若し人、无上菩提心を發せずして、但彼の國土の受樂間無きを

聞きて、樂の爲の故に生れんと願はゞ、亦當に往生を得ざるべきなり」とある。

この樂の爲の故に往生を願ふ徒が、卽ち罪が天に呼ばらずして、滿足が天に呼ばゝるの意である。无上菩提心とは大信心である。大信心は自己の罪惡に眼覺むる者にのみ起り來る佛の廻向である。

蓮如上人御一代記聞書の第百二十三條にも、「極樂はたのしむと聞いて參らんと願ひ望む人は佛にならず」とある。同じ意味であります。

さもあれ、彼の舌を以て汝等を嘗むる電光は何處にありや。汝等に種痘を植うべき狂亂は何處にありや。

見よ、われ汝等に超人(佛)を敎へん。超人(佛)はこの電光なり、超人(佛)はこの狂亂なり。」——

佛の大光明が、吾等を攝取したまふ趣は、電光一閃、吾等を一嘗に嘗てしまふが如しであらう。佛の大慈悲が一切衆生を哀憐したまふやるせない親心は、種痘を嫌つて逃げ廻る子供を、狂亂の如く追ひ廻る母親の如きものであらう。「種痘を植うる」の一句絕妙である。一度植疱瘡すれば、またと天然痘に罹らぬ如く、一度佛種子を植つけられた凡夫は長へに流轉輪廻の迷を斷ち切られて了ふのである。こゝの難有い趣を、經文には「火中蓮華を生ず」とも譬へられ、「無邊の聖德、識心に攬入し永く佛種

と爲る、」とも云はれ、或は「衆生の貪瞋煩惱の中に能く清淨の願往生の心を生ぜしむ、」とも說かれてある。

「狂亂」の二字は、一見甚だ變な文字であるが、字義まさに以上の私見の通りであると思ふ。涅槃經の偈頌に曰く。

如來爲一切
常作慈父母
當知諸衆生
皆是如來子
世尊大慈悲
爲衆修苦行
如人著鬼魅
狂亂多所爲

如來が衆生の爲に難行苦行を修したまふ大慈悲心は、恰も吾々人間が魔物に取り憑かれて、狂亂の所爲をするやうなものである、との佛意であらう。菩薩の狂亂の二字、これで明瞭である。

光炎菩薩、斯く語りたまひしとき、大衆の一人叫んで云く、「吾等はこれ以上綱渡人について聞くことを欲せず。吾等今、彼を見ることを得ん」。人皆は、光炎菩薩を見て大いに笑ふ。しかるを綱渡人は、かの語を聞き誤りて、已れの事と做し、その曲藝を始む。

所謂大聲俚耳に入らずである。光炎菩薩の說法が、輕業藝人の口上言と聞き間違へられるに至つては、實に言語道斷であります。一人の解するものなし。——これがそもそも道を說き法を談するものゝ古今東西その軌を同じうして、享くべき運命なるか、噫。

四

光炎菩薩、大衆を視て、驚愕の色あり。再び語つて曰く、

「人間は一條の綱(を渡りゆく行人)なり。此岸に動物あり、彼岸に超人(佛)あり。無底の深淵その下にあり。渡り終るも危きなり。途上にあるも危きなり。後を顧るも危きなり、顫ひ悸くも危きなり。足を停るも危きなり。

人間界の火宅無常の有様が能く書かれてある。これについて思ひ出すのは、善導大師の二河白道の譬の教である。諸君は、

その文の長きを厭はず、先づ心を虚しうして、幾度も〳〵熟讀せられ、大師が信仰の實驗を體得し、且つは菩薩の教に還つて、文簡なれども意の深い妙趣を看取せられたい。

二河白道の教

「また一切の往生人等にまふさく、いま更に行者のために一の譬喩をときて、信心を守護して、以て外邪異見の難を防がん。譬へば、人ありて西に向ひて、百千里を行かんと欲するが如きことあらんに、忽然として中路に二つの河あり。一つには是れ火の河、南にあり。二つには是れ水の河、北にあり。二河おの〳〵ひろさ百歩、おの〳〵深くして底なし。南北に邊なし、まさしく水火の中間に一つの白道あり。闊四五寸ばかりなるべし。この道、東の岸より西の岸に至るに亦長さ百歩、その水の波浪ま

じはりすぎて道をうるほす、その火焔また來りて道をやく。水火あひ交りて、常にして休息することなけん。この人すでに空曠のはるかなるところにいたるに、さらに人物なし。おほく群賊惡獸ありて、この人の單獨なるをみて、競ひ來りて、この人を殺さんとす。死を怖れて、直ちに走りて西にむかふに忽然としてこの大河を見て、すなはち自ら念言すらく、この河南北に邊畔を見ず、中間にひとつの白道を見る、きはめてこれ狹小なり。兩の岸あひ去ること近しといへども、何に由りてか行くべき。今日さだめて死せんことうたがはず。まさしく到り回らんとすれば、群賊毒蟲きほひ來りて、我に向ふ。まさしく西にむかひて道を尋ねて、しかも去んとすれば、また恐らくはこの水火の二河に墮せん。當時に惶怖することまた言ふべからず。すなはち自ら思念すらく、われ今回るともまた死せん、住すともまた死せん、去くともまた死せん。一種として死を免れざれば、われ寧ろこの道を尋ねて前に向ひてしかも去かん。すでにこの道あり、かならず度すべしと。この念を作すとき、東の岸に忽ちに人の勸むる聲をきく、仁者たゞ決定してこの道をたづねて行け。かならず死の難なけん。もし住せばかならず死せんと。また西の岸の上に人あり、喚うていはく、なんぢ一心正念にして直に來れ、われよく汝を護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれと。この人既にこゝに遣はし、かしこに喚ふをきゝて、すなはち自らまさしく身心にあたりて決定して道を尋ねて、直ちにすゝんで疑怯退心を生せず、あるひはゆくこと一分二分するに、東の岸の群賊等喚うていはく、仁者かへり來れ、

このみち險惡なり、過ぐることを得じ。かならず死せんこと疑はず。われ等すべて惡心ありて相向ふことなしと。この人よばふ聲を聞くといへどもまた回觀す。一心に直にすゝんで道を念じて而も去けば、須臾にすなはち西のきしにいたりて、ながくもろ〳〵の難をはなれ、善友あひみて慶樂することを已むことなからんがごとし。此はこれ譬喩なり。次にたとへを合せば、東の岸と云ふは、すなはちこの娑婆の火宅にたとふ、西の岸といふは、すなはち極樂寶國にたとふ。群賊惡獸詐り親しむといふは、すなはち衆生の六根、六識、六塵、五陰、四大にたとふ。人なき空迥の澤といふは、すなはち、つねに惡友にしたがひて。眞の善知識にあはざるにたとふ。水火の二河といふは、すなはち衆生の貪愛は水のごとく、瞋憎は火の如しとたとふ。中間の白道四五寸といふは、すなはち衆生の貪瞋煩惱のなかに、よく清淨願往生の心を生ぜしむるにたとふ。貪瞋强きによるがゆゑに、すなはち水火のごとしとたとふ。善心微なるがゆゑに、白道の如しとたとふ。また水波つねに道をうるほすといふは、すなはち愛心つねにおこりて、よく善心を染汚するにたとふ。また火焰つねに道をやくといふは、すなはち瞋嫌の心よく功德の法財を燒くにたとふ。人、道の上を行きて直に西に向ふといふは、すなはちもろ〳〵の行業を廻して、たゞちに西方にむかふにたとふ。東の岸に人の聲の勸め遣はすをきゝて、道を尋ねて直に西にすゝむといふは、すなはち釋迦既に滅したまうて、後の人見たてまつらざれども、なほ敎法ありてたづぬべきにたとふ。即ちこれを聲の如しとたとふるなり。あるひはゆくこと一

分二分するに群賊等よばひ回すといふは、すなはち別解、別行惡見の人等みだりに見解を說きて、たがひに惑亂し、および自ら罪を造りて損失するにたとふ。西の岸の上に人ありて喚うといふは、すなはち彌陀の願意にたとふ。須曳に西の岸に到りて善友あひみて喜ぶといふは、すなはち衆生久しく生死に沈んで曠劫より輪廻し迷倒して、自ら纏うて解脫するによりなし。仰いで釋迦發遣して、指へて西方に向はしめたまふことを蒙り、又彌陀の悲心招喚したまふによりて、いま二尊の心に信順して水火の二河をかへりみず、念々に遺ることなく、かの願力の道に乘じて、命を捨てゝのち、かの國に生ずることを得て、佛とあひみて慶喜すること何ぞ極まらんといふに喩ふるなり。また一切の行者、行住坐臥に三業の所修、晝夜時節を問ふことなく、つねにこの解をなし、つねにこの想をなす。かるがゆゑに廻向發願心となづく。」

超人は阿彌陀佛である、彼岸は淨土である。此岸の動物は群賊惡獸である。一條の綱は四五寸の白道である。此岸は即ち東岸にして三界無安の娑婆の火宅である。「渡り終るも危し云々」は「回るも死せん。住するも死せん、行くもまた死せん」に相當し、水火の二河は即ち無底の深淵である。言々相對比し來つて、妙言ふべからずであります。

人間の大なる所以は、そが目的にあらずして橋梁たるところに存す。人間の敬愛せられ得る所以は、そが往相にしてまた還相たるところに存す。

何といふ難有い言葉であらうぞ。人間は永遠に架け橋であり綱渡であり、此岸から彼岸に趣く人であつて、斷じて目的でなく標的でなく究竟でない。綱渡であるところに無限の努力があり、究竟でないからこそ無窮の創造が展開されるのである。

原文の Übergang は超え行くこと。過渡、通過等の意であり、Untergang は下り行くこと、沈むこと、沈沒、滅亡、破滅等の意である。これは一應の字義である。今、超人と人間との關係交渉からこの二字を檢討すると、二字は正しく、親鸞聖人の往相還相の二廻向に當ると信ずるところより、この廣大無邊の意義を含蓄せる往相、還相を拜借して譯字に當てた次第であります。

往相は往生であり、還相は還來であり、往相は迷から悟に入る姿で、還相は悟から迷に來る姿である。往相は衆生が如來の懷に飛び込む端的に、自我が絶對の無我(無限の大我とも言ふ)となることで、衆水悉く大海に入りて平等一味となる趣である。還相は、絶對の無我境・如來涅槃の一如法海から彼我相對の差別界に戻り來ることで、大海の水が逆流して衆河に還り來る趣である。

平たく言へば、吾々が淨土に入りて佛となるのが往相で、その吾々が佛の眞證を得て後、淨土から再び娑婆へ戻つて來て衆生を攝化して極樂に趣かしむる大活動が還相である。それゆゑに、かの觀世音菩薩の三十三身示現は、全く還相菩薩の攝化敎化である。

要するに、人間といふものは、未來久遠劫にわたりて、永遠無窮に、衆生が佛になり佛が衆生になるべく、淨土穢土橋上の

往還反復である。こゝに至つて始めて、光炎菩薩の言はるゝやうに、人間が大であり、また人間が敬愛せられ得るのである。これを外にして人間に意義はない。

以下各節悉く、還相菩薩を咏嘆した名文であります。

わが仰いで敬する人々は何ぞや。還相としてより外に、この世に生くる所以を解せざる人々なり。何となれば、此の如き人々は往相の人なればなり。

一文明瞭。往還二相の一體不二なる妙趣を看取せられよ。

わが仰いで敬する人々は何ぞや。大卑の人々即ち是なり。何となれば、大卑の人々は大尊の人にして、

彼岸欣求の矢なればなり。

衆生は卑しく佛は尊し、人は卑しくして超人尊し。この尊卑を知る人にして、始めて無爲涅槃を憧憬讃仰す。かゝる人にして、始めて、自己自身、大卑人にしてまた大尊人たるを領解するのであります。

わが仰いで敬する人々は何ぞや。還相の人たり、身を殺して仁を爲す人たる所以を、第一に星の後に求むることなく、ゆく〳〵この地の超人の地(佛地)ならんがために、地の爲に身命を惜まざる人即ち是なり。

功德を積んで神明の氣に入らうとしたり、萬行諸善を佛に廻向し奉りて往生の樂果を得やうとしたりするのが、皆、「星のうしろに求むる」人である。親鸞聖人は、萬行諸善皆雜毒の行也と喝破せられた。還相菩薩の活動は、唯々衆生可愛しの慈悲心に外ならぬ。衆生なければ佛なしぢや。釋尊の娑婆界往返が八千遍といはれてあるのも、畢竟は衆生悉皆成佛の大願を成就したまはむがためであらう。この地をして佛地たらしめよ。この大願より外には何も無いのが還相の目的である。功德を種にして佛たる資格を作らうなどといふ大妄想なぞの少しも無いところが難有いのである。

以上三節原文では、「人々」とあつて複數になつてゐるが、次節以下は「人」が單數になつてゐる。單數ではあるが定冠詞の單數であつて「その人を」と、鋭くきはどく適確直截に出て來て、文は一段と緊張して來る。

わが仰いで敬する人は何ぞや。悟らんがために生き、ゆく〳〵超人(佛)の生きんがために悟らんと欲する、その人即ち是なり。かくして還相たらんこそ、かゝる人の本懷なれ。

佛心が衆生の心に生れるのが即ち、佛がこの土に生れたまうたのである。佛心を生れしめんがために悟る、まことに還相菩薩の本志である。生れ來り生きゆくは悟道見性のため、悟道見性の自利は、衆生濟度の利他のためである。

わが仰いで敬する人は何ぞや。超人(佛)のために家を建て、大地・禽獸・草木を擧つて、超人(佛)のために備へんとて、勤勞發明する、その人即ち是なり。かくして還相たらんは、この人の本懷なればなり。

所謂、山川草木國土成佛が還相菩薩の本志本願である。豈に他あらんや、豈に他あらんや。

わが仰いで敬する人は何ぞや。己れの法を悅ぶ、その人即ち是なり。法は還相の本懷にして、また(彼岸)欣求の矢なればなり。

まことに、法悅は還相の本懷であり、極樂往生を希ふ矢である。貴ぶべきは法悅の一境地である。日々是好日の遊戯三昧

は法悅の人の獨壇場。餘人の伺ひ知るべきところでない。

わが仰いで敬する人は何ぞや。精神の一滴をも、自己のために殘留することなく、自己が全く法の精神たらむことを欲する、その人即ち是なり。かくしてかゝる人は、精神としてかの橋を歩まん。

往還幾萬回、唯法の爲である。身命を惜まず無上道を惜むの人である。還相菩薩たる所以である。

わが仰いで敬する人は何ぞや。その執着も法より生じ、その禍福も法より生ずる、その人即ち是なり。かくしてかゝる人は、法のために猶ほ生きんと欲し、

また法のためにもはや生きざらんと欲す。

生くるも死するも法の爲である。法以外に着するところなく、禍福・榮辱・毀譽・褒貶・其他一切の運命、悉く法に着するより生ずるの人。之を法然上人に見よ、之を親鸞聖人に見よ。

わが仰いで敬する人は何ぞや。餘りに多くの諸法を有するを好まざる、その人即ち是なり。それ、唯一不二の法は、二の法よりも、より以上に、法なり。何となれば、唯一不二の法は、二の法よりも、より以上に、禍福の據つて繫るべき因緣なればなり。

眞に然り眞に然り。法はあくまで一法でなければならぬ、無碍の一道でなければならぬ。而して永遠無窮にわたつて眞理たる唯一大乘の法門でなければならぬ。しかも、唯一不二の法門を說く人は、自ら禍福の繫はる因緣を作る。首刎ねられんも知るべからず、刀杖瓦石の難も來るべし。いかなる大難の來るも疑懼せざるが還相菩薩である。

かゝる禍を恐れて、朝に一法を說き、夕に他法を說くの輩は、法の爲に身を献ぐるにあらずして、身の爲に法を說くのである。その法が眞の法にあらざる所以である。

わが仰いで敬する人は何ぞや。全心を傾倒して惜むことなく、感謝を欲することなく、而うしてまた返すことなき、その人即ち是なり。かゝる人は返すことなし、何となれば、かゝる人は唯常に法施をな

すの人なれば、自守自衛の要、絶えて無ければなり。

還相菩薩でなければ出來ぬ全然無我の境地、大徳の行履である。凡夫の成し得る境涯ではない。人は皆自守自衛のために、心にもない僞善を行つてゐるではないか。

わが仰いで敬する人は何ぞや。骰子を振つて勝てるとき羞恥の色あり、而してその時、「吾は詐僞の賭博者にあらずや」と自から省る、その人即ち是なり。何となれば、還相がその本懷なればなり。

不義の富貴は浮雲の如し。僥倖は厭ふべき魔郷である。恥ぢて且つ避けざるべけんや。富貴は目的ではない、衆生攝化が本志であるからである。

わが仰いで敬する人は何ぞや。その行に先だちて金言を垂れ、而して常に、先きの立言よりも以上の事を爲す、その人即ち是なり。何となれば、還相がその本懷なればなり。

宗教の極致は、言よりも行、理よりも事である。併しながら、その言は必ず金言でなくては何の所詮もない事ぢや。釋尊の說法が金口の說法といはれてあるのも成程とうなづかれる。

わが仰いで敬する人は何ぞや。未來の人々(の往生成佛)を慶信して、過去の人々を濟度する、その人即ち是なり。何となれば、かゝる人は、現在の人々の

ためには、還相たるがその本懷なればなり。

一讀甚だ解し難き文章である。が、しかし、親鸞聖人の信仰からは、何の苦もなく、文意が解けるから難有い。

還相菩薩の任務は永遠に無窮である。著者のニイチエ先生も久遠轉生の信者である。還相菩薩は即ち久遠轉生して、衆生を濟度するのである。即ち、無量壽であり、無量光である。聖人の正信偈に

功德の大寶海に歸入すれば
必ず大會衆の數に入ることを獲
蓮華藏世界に至ることを得れば
即ち眞如法性の身を證せしむ
煩惱の林に遊んで神通を現じ

生死の薗に入りて應化を示す

とあるが即ちそれで、一たび佛となつて、眞如法性の身を證せしめられた曉には神通自在の妙用で、過去の祖先緣者は云ふに及ばず、あらゆる人々の六道に輪廻せる人を救ひ助くるといふのが、彌陀の本願力の廻向である。將來の人々をば勿論、悉くまた成佛得道せしめねば置かぬの本願であるから、未來の人々に對しては慶信の念を懷かずにはゐられない。原文のrechtfertigenの一字は英語のjustifyに當る字で、「その正しきを證する、正しとする・擁護する」等の意味で、宗教上の用語としては、「罪なしと宣告する」の意であるから、こゝでは文義の上から、慶信と譯して置いた。

さて現在では、還相菩薩は、現前の人間に當面して、現實の

生死海に浮沈し、その善巧方便で、普く衆生の大導師となるのが、その出世の本懷であるのは、云ふまでもない。現當二世ところではない、過去まで救濟するといふのが彌陀佛の本願である、實に不可稱・不可說・言語道斷であつて、唯仰ぐべし信ずべしである。

わが仰いで敬する人は何ぞや。己れの神を愛(信)するが故に、己れの神を叱咤する、その人即ち是なり。何となれば、かゝる人は、己れの神の怒のために、還相たらざるを得ざればなり。

これは、禪で言ふ悟後の修行、眞宗でいへば、信後の懺悔である。佛を信じない人には、佛に對して全然濟むも濟まぬもあつたものでない。しかるに、佛を信ずる人にあつては、今日の信心は昨日の信心を叱咤懲戒する底に、深く突つ込んで行かなければならぬ。固より、信の一念に動きはないけれど、一日又一日、不斷の精進を重ねて、自己の魂に眼覺め、佛の慈悲を仰ぎ、日々夜々懺悔して勇往邁進するところがなくてはならぬ。

信心獲得そのものが、實は容易の事ではない。「難中の難之に過ぐるなし」と聖人の正信偈に說かれてある通りである。自分で勝手な佛をこしらへて拜んだり、獨り飲み込みのあやふや信心に安住してゐたり、自分の道具に使用する佛をこしらへて見たりする。しかしながら、かゝる場合にあつても、佛は難有いもの位のことは心得てゐるのである。唯その難有さが徹底してゐないから、自作自造の佛に安んじてゐるのである。この時、

一番、安逸懈怠な心を振り捨て、雑行雑修を抛棄し、「三千世界に満てらん火をも過ぎ行きて法を聞く」底の大憤志を起さねばならぬ。これが即ち、己の神を叱咤するの謂ぢや、己の佛をかなぐり捨てて、眞の佛に接するのぢや。誠に、危いかな危いかなであります。

禪の方では、「佛を罵しり祖を詈りて、佛病祖病ともに一言下に喝破して痕跡を留めず」などゝいふ。これも無佛無祖の無見からなら、罵詈は無用の沙汰であらう。佛を信ずるがゆゑに祖を禮するが故にこそ、喝破叱咤の要もある譯で、畢竟は己れの妄信妄分別を驅逐するの意に外ならぬ。かゝる大膽不敵な勇猛心發憤心があればこそ、遂に眞の佛眞の祖に接するやうになり、手の舞ひ足の踏むところを知らざるに至り、終に「菩薩清涼の月、畢竟空に現ず、衆生心水清ければ、菩提の影は中に現ず」る靈境に遊ぶのであらう。「神の怒のために」とは、佛祖に激勵せしめらるるの意に外ならぬ。

わが仰いで敬する人は何ぞや。その心の傷むことも極めて深く、一些事のために還相たり得る、その人即ち是なり。此の如くにしてかゝる人は、嬉々としてかの橋を歩まん。

自分が傷けられたとき、深くその傷みを感ずる心の人ならでは、他人の傷さも分らぬ道理である。善につけ惡につけ、敏感の人でなければ、衆生攝化は出來ない。「一些事のために還相たり得る」の一句、殊に妙である。一些事を粗末にしないのが佛

法であるとは、常に聞さかれてゐるのであるが、さて吾等の日々の行のふしだらさ、唯々慚愧の外はない。

一塵一芥も皆是佛種

である。菅原洞禪師編禪門佳話より、左の難有い一節を拜借して、吾等の戒めとする。

『兎角禪僧と云へば「釋迦彌勒も是れ兒孫」などと大言壯語、隨つて日常の行持も、一些事に頓着せざるが如く解する者あるは遺憾の至りである。「一粒米の重きこと須彌山の如し、七十二功豈に等閑ならんや」。この佛意を體して、一紙一塵と雖も麁末に取扱はぬのは、眞の禪者である。

往昔、一僧あり、師を求めんとして、叡山の一寺に大德を訪ねんと山路へかゝつた。だん〳〵行くと一の谷川がある。この谷川の上流が大德の寺と聞き、喜び勇んで道を急ぐ途端、フト見ると川上から一莖の菜の葉が流れて來た。僧これを見て思へらく、一塵一芥悉く佛物である。然るにこの菜は定めし信者の供養にかゝるものならんが、これを漫りに流すと云ふは、定め し行解相應の大德ではあるまい、何ぞ遙々訪ねて斯る無道心者を師と仰がんやと大いに落膽して元來た途を戻らんとした。折しも上の方から走り來つた一僧がある。「何事で御座る」と問へば、「今誤つて一本の菜の葉を流したれば、それを拾ひに行くのであると答へる。これを聞いた件の僧は、「貴僧は如何なる方なりや」と尋ねると、「この山奥に住する大德の弟子である」との答へに、僧は再び山に登り、大德の會下に參じて修行したとの事である。

とは一場の昔語、これを今人の行履に徴すれば、豪放無二なる南天棒中原鄧州和尚は、平素信者から貰ふ進物の包紙は丁寧に皺伸しをして書信の用箋又は手習用にせられる。先年遷化せられた禪門近代の大徳森田悟由禪師は、新聞雑誌の小さな包紙すら其儘には捨てられなかつた、即ち日本紙は自ら鋏を入れて小撚にし、洋紙は剪つて一枚として同じく習字用に供せられたものである。

他の信施を麁末にするは佛意に背く。この故に彼の伊深の泰龍和尚は、中秋の一日、會下の大衆が大根作務を監督しつゝ、一雲衲が大根の枯葉を二三枚切り棄てたのを見て、嚴然として下山を申し付けた。いくら謝罪しても赦さない。役寮一同協議の結果、「あれは平素より人並勝れた綿密の僧であれば、爾後は必ず斯様な不注意は致しませぬ是非お許しを……」と云つて願ひ出たが、「一度佛意に背きしものは我が會下には置くことならず」と、遂に下山を命じたと云ふ事である。

敢て大根の枯葉一枚が問題である譯ではない。吾人は深く和尚の意のあるところを考へ、以て深く省みるところがなくてはならぬ。』

蓮如上人御一代記聞書第百五十三條に、

「上人は、御門徒の進上物をば、御衣の下にて御おがみ候。又佛物と思し召し候へば、御自身のめし物までも、御足にあたり候へば、御いたゞき候。御門徒の進上の物、則ち聖人（親鸞）よりの御あたへと思し召し候。」

同じく第百五十五條には

「蓮如上人、御廊下を御通り候て、紙切のおちて候ひつるを御覽ぜられ、佛法領の物をあだにするかやと仰せられ、兩の御手にて、御いたゞき候。總じて紙の切なんどのやうなる物をも、佛物と思召御用ひ候へば、あだに御沙汰なく候ひし。」

とある。其他、この御一代記聞書には、勿體ない事ばかり書かれてあつて、「一些事のためにも還相菩薩たり得る」「活證は、數限りもないのであります。

わが仰いで敬する人は何ぞや。一切萬物を包有網羅して、忘我の境に遊ぶことを得るばかり、その心の豐麗なる、その人即ち是なり。かくして、一切萬物は、かゝる人の還相とならむ。

古歌に、「世の中に我といふものの棄てて見よ天地萬物すべてわがもの」とある。この文と同意である。むづかしく云へば、一即一切、一切即一である。佛法の宗致、畢竟無我の二字に極まるものであらう。蓮如上人御一代記聞書に

「佛法には無我と仰せられ候。われと思ふことは、いささかあるまじきことなり。われはわろしとおもふ人なし、これ聖人の御罰なりと、御詞候。」（第四十八條）

「彌陀をたのめる人は、南無阿彌陀佛に身をばまるめたる事なり。（第六十二條）」

「上人、衣のえりを御たゝきありて、南無阿彌陀佛よと仰せられ候。又御疊をたゝかれ南無阿彌陀佛にもたれたるよし、仰せられ候ひき。（第六十三條）」

等の各條、何れも、上人の心の豐麗なる無我境忘我境が伺はれる。

永嘉大師の證道歌の、

心鏡明、鑒無礙　廓然瑩徹周沙界
萬象森羅影現中　一顆圓光非內外

も、無我の心鏡には、萬法がそのままの實相を映じ出すの意であらう。又、

一性圓通一切性　一法徧含一切法
一月普現一切水　一切水月一月攝

諸佛法身入我性　我性還與如來合

も、譯文の意と相合して、妙言ふべからず。蘇東坡の詩の、

無一物中無盡藏　有月有花有樓臺

も同じ心境である。

此の如き豐麗な心境に到り得た人に取つては、事々物々、還相の緣である。

わが仰いで敬する人は何ぞや。その智慧も無碍にして、その慈悲もまた無碍なる、その人即ち是なり。かくして、その智慧はその慈悲の腸たるに外ならず。かゝる人をして還相たらしむるは、この慈悲心なり。

佛心とは大慈悲心である。不可思議なる佛智は大慈悲心の顯現に外ならない。大慈悲心は衆生濟度より外にはない。一文明瞭、佛敎の端的、一にこの文に盡く。

無碍の二字は能く〳〵味はねばならぬ。吾等凡夫の智慧は有碍である。無碍と有碍と相去ること、まことに白雲萬里、十萬

億土も啻ならざるを知つて、始めて佛の廣大無邊の大光明を仰信することが出來るのである。

人間の上に懸れる黑雲より、一つ一つ落下し來る、重き點滴の如き、その凡ての人々は、わが仰いで敬するところなり。かゝる人々は電光の來るを告げん、而して告ぐる人々として還相たらん。

見よ、われは電光の豫言者なり。雲より落ち來る重き滴なり。然らば則ち、電光とは何ぞや、曰く超人。（佛）。」

光炎菩薩こゝに至つて、始めて、われはこれ生死海に廻入して衆生を教化する還相菩薩なり、と名乘り出でたまうた。法を

說くものは、無憂懼の大權威を有せねばならぬ。しかしながら、われは超人（佛）なりとは斷じて云はれて無いところを、よく〳〵味はねばならぬ。われは、あくまで超人の豫告者である、佛を敎ふるものである、佛願を傳ふるものである、といふのが還相菩薩の信念である。わが親鸞聖人は、われ等より見れば、還相菩薩で居らせられる。が聖人はわれは菩薩なりと曰うたことはない。實に絕對の謙讓である、仰いで恐れ入らざるを得ないところであるが、その一たび如來の信心を說きたまふや、實に絕大の權威者で　ゐらせられた。「歎異抄」の第七章、

「念佛者は無碍の一道なり。その謂いかんとならば、信心の行者には、天神地祇も敬伏し、魔界外道も障碍することなし、罪業も業報も感ずることあたはず、諸善も及ぶことなき故に、無

碍の一道なり。」

を拜讀するごとに、われ等直ちに佛の大梵音を聞くが如くに感ずる。

雲と滴水と電光の譬喩的文字は、華嚴經の離世間品の、

「大慈の雲を興起して、普く一切を覆ひ、大慈の電を明耀して、雷のごとく法洪の音を震ひ、四辯は法雨を澍ぎ、八正の甘露水は、煩惱の火を除滅して、一切の義に安住す。」

と相似てゐるのも妙であります。

五

光炎菩薩、說いて玆に至り、再び大衆を諦視し、默して以爲らく、

「彼等こゝに立ち、彼等こゝに笑ふ。彼等はわれを解せざるなり、われは彼等の耳に語るべき口にあらず。

彼等が耳を以て聞かず眼を以て聞くを學び得んが